國文學雜誌社輯

國語漢文科

中等教員志望者必攜

檢定試驗問題

東京

明治

目次

第一回　國語科（明治十八年）……一
仝　漢文科（仝　年）……一七
第二回　國語科（明治十九年）……二三
仝　漢文科（仝　年）……三〇
第三回　國語科（明治二十年）……三五
仝　漢文科（仝　年）……四三
第四回　國語科（明治二十一年）……四五
仝　漢文科（仝　年）……五〇
第五回　國語科（明治二十四年）……五一
仝　漢文科（仝　年）……五七
第六回　國語科（明治二十六年）……五八

仝　漢文科（仝　年）……六二
第七回　國語科（明治二十七年）……六四
仝　漢文科（仝　年）……六七
第八回　國語科（明治二十八年）……六九
仝　漢文科（仝　年）……七三
第九回　國語科（明治二十九年）……七四
仝　漢文科（仝　年）……七八
第十回　國語科豫備試驗（明治三十年）……八〇
仝　漢文科豫備試驗（仝　年）……八三
仝　國語科本試驗（仝　上）……八五
仝　漢文科本試驗（仝　年）……八五
第十一回　國語科豫備試驗（明治三十一年）……八六
仝　國語科本試驗（仝　年）……八九
仝　漢文科豫備試驗（仝　年）……九一
仝　漢文科本試驗（仝　年）……九二
第十二回　國語科豫備試驗（明治三十二年）……九五
仝　漢文科豫備試驗（仝　年）……九八
仝　國語科本試驗（仝　年）……一〇〇
仝　漢文科本試驗（仝　年）……一〇二
第十三回　國語科豫備試驗（明治三十三年）……一〇六
仝　漢文科豫備試驗（仝　年）……一一〇
仝　國語科本試驗（仝　年）……一一二
仝　漢文科本試驗（仝　年）……一一三
第十四回　國語漢文科豫備試驗（明治三十三年）……一一七
仝　國語漢文科本試驗（明治三十四年）……一二一
第十五回　國語漢文科豫備試驗（明治三十五年）……一二四

國語漢文科本試驗（全　年）……一二九

本書檢定試驗問題の答
案集は目下印刷中なり

目次終

國語漢文科

中等教員志望者必携

問題の部

第一回　國語科（明治十八年）

解釋課

一　榮花物語浦々のわかれの卷内大臣伊周の條

とりの時ばかりにあやしのあじろの車のこゝら
かりともにてこの宮をさしてたゞきにくるにあ
のあかきぬなどきたるものどもたゞよりにより
はとてながえにさとつけばあらすや殿の木幡に
りといふを聞てこの者どもみなさりぬ御車みか

のおりさせ給ぬ撿非違使どもみなおりて並ゐたりみたてまつれば御年はたゞ今廿二三ばかりにて御かたちのとゝのほりふとりきよげにて色あひ誠に白くめでたしかの光源氏もかくやありけんと見奉る薄鈍の御ぞのなよよかなる三つばかり同じ色の御單の御直衣指貫同じさまなり御身のざえもかたちもこの世の上達部には餘り給へりと聞ゆるぞかしあたらものをあはれに悲しきわざかなと見奉るに涙も止めがたうて皆泣きぬ乘りながらも入らせ給はで宮のれはしませば我ひとりは猶畏まり給へるもいと悲しさておはしましぬれば帥木幡に參らせたりけるが只今なん歸りて候ふと奏せさすればむげに夜に入りぬれば今宵は能くまもりて明日卯の時にとある宣旨なりされば夜一夜いもねで立ち明したり宮の御まへ帥殿母北の方ひとつに手を取りかはして惑はせ給ふ

二　源氏物語初音の卷明石の姫君の條

けふは子の日なりけり實に千歳の春をかけて祝はんにことわりなる日なり姫君の御方に渡り給へれば童下仕へなどおまへの山の小松ひき遊ぶ若き人々の心地ども置き所なく見ゆ北のおとゞよりわざとがましく玄集めたる鬚籠ども檜わりごなど奉り給へりえならぬ五葉の枝にうつれる鶯も思ふ心あらんかし

年月を松にひかれてふる人にけふ鶯の初音きかせよ

音せぬさとのと聞え給へるを實にあはれと思し知ることいみもえし給はぬ氣色なりこの御かへりは自ら聞え給へ初音惜み給ふべき方にもあらずかしとて御硯取りまかなひ書かせ奉らせたまふいと美しげにて明暮見奉る人だに飽かず思ひ聞ゆる御有樣を今まで覺束なき年月のへだたりけるも罪えがましく心苦しとおぼす

ひきわかれ年はふれども鶯のすだちしまつのねをわすれめや

幼き御心にまかせてくだくだしくぞあんめる

三　伊勢物語第八十三段

むかし水無瀨に通ひ給ひし惟喬の親王例の狩しにおはします御供にうまのかみなる翁仕う奉れり日頃經て宮に歸り給ひけり御おくりして疾くいなんと思ふに大御酒給ひ祿給はんとて遣はさざりけりこのうまのかみ心もとながりて

枕とて草ひきむすぶこともせじ秋の夜とだにたのまれなくに

とよみける時は三月の晦日なりけり親王大殿ごもらで明し給ひてけりかくしつゝまうで仕う奉りけるを思ひの外に御ぐしおろさせ給ひて小野といふ所に住み給ひけり正月に拜み奉らんとて小野に詣でたるに比叡の山の麓なれば雪いと高し强ひて御室に詣でゝ拜み奉るにつれづれといと物悲しくておはしましければやゝ久しく侍ひて古の事など思ひいで聞えさせけりさても侍ひてしがなと思へどおほやけごとどもありければ得侍はで夕暮に歸るとて

わすれては夢かとぞおもふおもひきや雪ふみわけて君を見んとは

とてなんなくなくきにける

四　增鏡ふぢ衣の巻順徳院の后宮の條

前のみかどは四にて廢せられ給ひて尊號などの沙汰だになし御母后も山里の御すまひにていと心ぼそくあはれなる世をつきせずおぼしなげくこの宮は故攝政殿の姫君にてものし給へば歌の道にもいとかしこう渡らせ給へば大かた奥ふかう玄めやかに重き御本性にてはかなき事をもたやすくもらさせ給はず御琴などもかぎりなき音を彈きとり給へれどをさをさ掻きたてたまふ世もなくあまりなるまでうもれたる御もてなしを佐渡の院もかぎりなき御志の中に飽かずなむ思ひ聞えさせ給ひけるかの遠き御わかれの後はいみじうものをのみ思しくだけつゝいよいよえづみふしておはしますにふるく仕うまつりける女房の里にこもり居たりけるもとよりあはれなる御消息をきこえて十月一日の頃御衣がへの御衣を奉りたりける御返事に

思ひいづるころもはかなし我も人もみしにはあらずたどらるゝ世に

又御手ならひのついでにからうじてもれけるにや

消えかぬる命ぞつらきおなじ世にあるもたのみのかけぬちぎりを

さこそは實に思しみだれけめおろかなる契だにかゝるすぢのあはれは淺くやは侍るいかばかりの御心の中にてすぐし給ふらむとかたじけなし

五　落窪物語巻一あこぎ消息の條

女君の御方を見給へばまめやかにいと美しげなればいとゞ限なくおもほし增りてい

とあはれと思す粥など少しまゐりて臥し給ひぬ夜さりハ三日の夜なればいかさまにせんこよひもちひいかでまゐるわざもがなと思ふに又いふべきかたもなければ和泉殿へ文かく

いとうれしう聞えさせたりしものを賜はせたりしなん悦び聞えさする又あやしとは思さるべけれどこよひもちひなんいとあやしきさまにてよう侍る取り供すべくだものなど侍りぬべくハ少したまはせよまらうどなんしばしと思ひ侍りしを四十五日の方違ふるになん侍りけるされば此の物どもハ暫し侍るべきをいかゞ盥はざうの清げならんをしばし賜はらん取り集めていとかたはらいたけれど頼み聞えさするまゝに

とてやりつ

六　宇治拾遺物語巻二用經あらまきの事

今ハ左京のかみなりける古上達部ありけり年老いていみじう古めかしかりけり下わたりなる家にありきもせでこもりゐたりけりそのつかさのさくわんにて紀の用經と

いふものありけり長岡になん住みける つかさの目なればこのかみの許にも來てなん音づれける此の用經大殿にまゐりて贄殿にゐたるほどに淡路守よりちかが鯛のあらまきを多く奉りたりけるをにへ殿にもてまゐりたり贄殿のあづかりよしずみに二まき用經こひとりてまきにさゝげて置くとてよしずみにいふやうこれ人してとりに奉らんをりにおこせ給へと言ひおく心の中に思ひけるやうこれわがつかさのかみに奉りて音づり奉らんと思ひてこれをまきにさゝげて左京のかみのもとにいきて見ればかんの君いでゐにまらうど二三人ばかり來てあるじせんとて地火爐に火おこしなどしてわがもとにて物くはんとするにはかばかしき魚もなし鯉鳥など用ありげなりそれに用經が申すやう用經がもとにこそ津の國なる下人の鯉のあらまき三つもてまうで來たりつるを一まきたべ試み侍りつるがえもいはずめでたく候ひつればいま二まきはけがさでおきて候ふ急ぎてまうでつるに下人の候はでもてまゐり候はざりつるなりたい今とりにつかはさんハいかにと聲高くゑたり顔に袖をつくろひて口わきかいのごひなどしてゐあがりのぞきて申せばかゝるべき物のなきにいとよき事かな

とくとりにやれとのたまふまらうど共もくふべき物のさふらはざめるに九月ばがりの比なればこの比鳥のあちはひいとわろし鯉はまだいでこず鯛はきいのものなりなどいひあへり用經馬ひかへたるわらはを呼びとりて馬をば御門のわきにつなぎてたゝ今走り大殿ににへ殿の預りの主にその置きつるあらまきたゞ今おこせ給へとさゝめきて時かはさずもてこほかによるなとく走れとてやりつさて狙あらひてもてまゐれと聲たかくいひてやがて用經けふの庖丁ゝ仕らんといひてまなばしけづり鞘なる刀ぬいてまうけつゝあな久しいづらきぬやなど心もとながりゐたりおそし〳〵と言ひゐたるほどにやりつる童木の枝にあらまき二つゆひつけてもて來たりいとかしこくあはれ飛ぶがごと走りてまうで來る童かなとほめてとりてまな板の上にうちおきてとゞ〳〵しく大鯉つくらんやうに左右の袖つくろひくゝりひきゆひ片膝たていま片膝をばふせていみじくつぎつぎしくゐなしてあらまきの繩をおしきりて刀して鱗をおし開くにほろほろと物どもこぼれて落つるを見れば平あしだ古玄きれ古わらうづふるぐつかやうの物のかぎりあるに用經あきれて刀もまな箸もうちすてゝ沓もはきあへず逃げていぬ左京のかみも客人もあきれて目も口もあきて居たりまへなるさぶらひどもゝおさましくて目を見かはして居なみゐたる顏どもいとあやしげなり物くひ酒のみつるあそびもみなすさまじくなりて一人たち二人たちみな立ちていぬ左京のかみの曰く此のをのこをばかくえもいはぬ玄れもの狂ひとは知りたりつれどもつかさのかみとて來むつびつればよしとは思はねど追ふべき事もあらねばさと見てあるにかゝるわざをしてはからんをばいかゞすべきものあしき人ゐはかなき事につけてもかゝるなりいかに世の人聞き傳へて世の笑ひぐさにせんとすらんとそらを仰ぎてなげき給ふ事限なし用經ゐ馬にのりてはせちらして殿にまゐりてにへ殿の預りよしずみに逢ひて此のあらまきをば惜しとおぼさばおいらかに取り給ひてはあらでかゝる事玄いで給へると泣きぬばかりに恨みのゝしる事がぎりなし（以下畧）

七　神皇正統記後醍醐天皇の條

次に功田といふことは昔ゐ功の品に玄たがひて大上中下の四の功をたて田をあかち給ひその數皆さだまれり大功は世々にたえずその下つかたゐ或ゐ三世につたへ孫

子につたへ身にとゞまるもあり天下を治むるといふことは國郡を專らにせずしてその事となく不輸の地を立てらるゝことのなかりしにこそ國に守あり郡に領あり一國の内皆國命の下にて治めしゆゑに法にそむく民なしかくて國司の行迹を勘へて賞罰ありしかば天下の事掌をさして行ひやすかりきその中に諸院諸宮に御封あり親王大臣又かくのごとしその外官田職田とてあるも皆官符をたまはりてその所の正税をうくるばかりにて國ゝ皆國司の吏務なるべし

八　徒然草卷下五十七段

達人の人を見る眼ゝ少しも誤る所あるべからず例へば或人のよに虚言を構へ出して人をはかる事あらんにすなほにまことゝ思ひていふまゝにはからるゝ人あり又あまりに深く信をおこして猶煩はしく虚言を心得そふる人あり又何としも思はで心をつけぬ人有り又いさゝかおぼつかなく覺えて頼むにあらず頼まずもあらで案じゐたる人有り又誠しくは覺えねども人のいふ事なればさもあらんとてやみぬる人も有り又さまざまに推し心得たるよしにてかしこげにうちうなづきはゝゑみて居たれどつやつや知らぬ人有り又推し出してあはれさるめりと思ひながら猶あやまりもこそあれとあやしむ人あり又異なるやうもなかりけりと手をうちて笑ふ人あり又心得たれども知れりともいはずにおぼつかなからぬゝとかくの事なく知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり又この虚言のほいをはじめより心得て少しもあざむかず構へ出したる人とおなじ心になりて力を合する人あり愚者の中のたはぶれだに知りたる人の前にては此のさまざまの得たる所詞にても顔にてもかくれなく知られぬべしまして明らかならん人の惑へる我等を見ん事掌の上の物を見んが如したゞしかやうの推量にて佛法までを准へいふべきにはあらず

九　讀史餘論卷十近衛左大臣經忠を論ずる條

其後義時三帝を或ゝ流し或ゝ廢し奉り後堀河を立て參らせしに近衛の家實義時がはからひにて攝政せらる此の人ゝかの基通が子にて土御門院の御時の攝關にてありきされば二代の攝關にてありし人の白となり順德院の御時にもとのまゝに關白たりきされば二代の攝關にてありし人の其の君をば陪臣義時がために流しすて奉らせ又それが計らひのまゝに後の朝に仕へ

て攝政せらる凡此等の人々のふるまひいかで大臣の義ありとは申さるべき思ふによ
く恥ぢらざる人々にてありけり之を譬ふに五代の時の大臣によく似たる事にてある
や中世よりこのかた喪亂之際節に臨み義を思ひ力を竭し死を致すいたい武人のみな
り世すこしも穩になりぬれば尊位厚祿に居て武人をば奴隷雜人の如くに思ひなし世
亂れし時には捧首鼠竄して一人も身を挺で忠を致すものなきい公家と僧徒のみ也誠
に國の蠹害とは此輩をぞいふべきされば天道い天に代りて功を立る人にむくい給ふ
理なれば其後武家世を知り給ふ事其故ある事ぞと覺え侍る然るに建武の亂出來し初
に近衞殿い北朝にしても關白になされしかどそれを捨て最初に南朝に參られき其餘
大臣にては吉田の內大臣從一位藤定房なり攝家の人々にては二條の師基も參り給ひ
後には關白し給ひき廿一年が程隔たりて後延文二年に一條の內嗣も參り給ひき就中
近衞殿一條殿い共に嫡子にておはせし人々のかく有しこと誠に其家祖に愧給はぬと
こそ申すべけれ

一〇　萬葉集卷一過二近江荒都一時柿本朝臣人麿作歌

玉手次畝火之山乃橿原乃日知之御世從阿禮座師神之盡樛木乃彌繼嗣爾天下所知食之
乎天爾滿倭乎置而青丹吉平山乎越何方御念食可天離夷者雖有石走淡海國乃樂浪乃
大津宮爾天下所知食兼天皇之神之御言能大宮者此間等雖聞大殿者此間等雖云春草之
茂生有霞立春日之霧流百磯城之大宮處見者悲毛

反歌

樂浪之思賀乃辛崎雖幸有大宮人之船麻知兼津

一一　萬葉集卷六藤原宇合卿遣二西海道節度使一之時高橋連蟲麿作歌

白雲乃龍田山乃露霜爾色附時丹打超而客行公者五百隔山伊去割見賊守筑紫爾至山乃
曾伎野之衣寸見世常伴部乎班遣之山彥乃將應極谷潛乃狹渡極國方乎見之賜而冬木成
春去行者飛鳥乃早御來龍田道之岳邊乃路爾丹管士乃將薰時能櫻花將開時爾山多頭能
迎參出六公之來益者

反歌

千萬乃軍奈利友言擧不爲取而可來男常曾念

一二　萬葉集卷十九慕レ振二勇士之名一歌一首幷短歌

知智乃實乃父能美己等波播麻蘇葉乃母能美己等於保呂可爾情盡而快良牟其子奈禮夜母
丈夫夜無奈之久可在梓弓須惠布理於許之投矢毛知千尋射和多之劒刀許思爾等理波伎
安之比奇能八峰布美越左之麻久流情不障後代乃可多利都具倍久名乎多都倍思母

反歌

丈夫者名乎之立倍之後代爾聞繼人毛可多里都具我爾

一三　古今集春

うりんゐんのみこのもとに花見にきた山の

ほとりにまかりける時によめる　そせい

いざけふは春の山べにまじりなむくれなばなげの花のかげかは

一四　同　秋

題しらず　つらゆき

たが秋にあらぬものゆゑ女郎花なぞ色に出てまだきうつろふ

一五　同　雜

題しらず　よみ人しらず

とゞめあへずうべもとしとはいはれけり志かもつれなく過ぐるよはひか

設問課

一　牽ト云フ語ハ如何ナル意味ナルヤ且ツ作用言中幾段ノ活用ヲ爲スヤ

二　里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

右ノ歌ノ係リ結ビハ如何

三　作用言ノ中變格ノ種類及ビ其格中ノ語數幾何アリヤ且ツ良行四段ノ中用法ノ異ナル詞幾何アリヤ

四　作用言ノ中毎段共變格使令ノ詞ノ用法ハ如何

五　古へより後世のまされること萬の物にも事にも多し其一つを言はむに古へい橋をならびなき物にして愛でつるを近き世蜜柑といふ物ありて此蜜柑に較ぶれバ橋ハ數

にもあらずけおとされたりその外柑子袖九年母だいだいなどのたぐひおほき中に蜜柑ぞ味ことにすぐれて中にも橘によく似てこよなく優れる物なり此一つにて推測るべし或は古へにはなくて今はある物も多くいにしへゝ善くて今のゝ惡きたぐひ多しこれを以て思はゞ今より後も又いかにあらむ今に優る物多く出來べし

右文中ノ誤リヲ正スベシ

作文課

一 某各人奉職スル所ノ校名ニ從フベシ學校記

二 教育博物館記

三 修身學中ニ西洋修身ノ書ヲ加フルノ可否ヲ論ズ

四 學力試驗ニ赴クトキ同校教員ニ遺シ置ク書翰

五 上京中學校ヨリ依託ノ書籍器械等ヲ購求シテ其委細ヲ報知スル書翰

六 方今ノ作文ニハ何如ナル文體ヲ目的トスベキヤノ問ヒニ答フル書翰

第一回　漢文科　（明治十八年）

左ノ三問ノ訓點解釋

一 孟子

丈夫之冠也父命之女子之嫁也母命之往送之門戒曰往之女家必敬必戒無違夫子以順爲正者妾婦之道也居天下之廣居立天下之正位行天下之大道得志與民由是不得志獨行其道富貴不能淫貧賤不能移威武不能屈此之謂大丈夫

二 左傳

芒々禹跡畫爲九州經啓九道民有寢廟獸有茂草各有攸處德用不擾在帝夷羿冒于原獸忘其國恤而思其麈壯武不可重用不恢于夏獸臣司原敢告僕夫虞箴如是可不懲乎

三 史記淮陰侯傳

信乃使萬人先行出背水陣趙軍望見而大笑平旦信建大將之旗鼓鼓行出井陘口趙開壁擊之大戰良久於是信張耳佯弃鼓旗走水上軍水上軍開入之復疾戰趙果空壁爭漢鼓旗逐韓

信張耳韓信張耳已入水上軍軍皆殊死戰不可敗信所出奇兵二千騎共候趙空壁逐利則馳入趙壁皆拔趙旗立漢赤幟二千趙軍已不勝不能得信等欲還歸壁壁皆漢赤幟而大驚以爲漢皆已得趙王將矣兵遂亂遁走趙將雖斬之不能禁也於是漢兵夾擊大破虜趙軍斬成安君泜水上禽趙王歇

左ノ三問ノ內一問ノ訓點解釋

四　資治通鑑唐紀三十三　至德元載

杲卿至洛陽祿山數之曰汝自范陽戶曹我奏汝爲判官不數年超至太守何負於汝而反邪杲卿瞋目罵曰汝本營州牧羊羯奴天子擢汝爲三道節度使恩幸無比何負於汝而反我世爲唐臣祿位皆唐有雖爲汝所奏豈徒汝反邪我爲國討賊恨不斬汝何謂反也臊羯狗何不速殺我祿山大怒幷袁履謙等縛於中橋之柱而咼之杲卿履謙比死罵不虛口顏氏一門死於刀鋸者三十餘人

五　八大家　韓文原鬼

漠然無形與聲者鬼之常也民有忤於天有違於民有爽於物逆於倫而感於氣於是乎鬼有形於形有憑於聲以應之而下殃禍焉皆民之爲之也其既也又反乎其常

六　五代史周德威傳

梁軍圍晉太原下令軍中曰能生得周陽五者爲刺史有曉將陳章者號陳野叉常乘白馬被朱甲以自異出入陣中求周陽五欲必生致之晉王戒德威曰陳野叉欲得汝以求刺史見白馬朱甲者當甲者宜善備之德威笑曰陳章好大言耳安知刺史非臣作邪因戒其部兵曰見白馬朱甲者當佯走以避之兩軍將陳德威微服雜卒伍中陳章出挑戰兵始交德威部下見白馬朱甲者因退走章果奮稍急追之德威回槊擊鐵鎚擊之中章墮馬遂生擒之

左ノ三問ノ內一問ノ訓點解釋

七　別梁日孚序　　王陽明

聖人之道若大路雖有跛蹩行而不已未有不至而世之君子願以爲聖人之異於人若彼其甚遠也其爲功亦必若彼其甚難也而淺易若此豈其可及乎則從而求之艱深恍惚溺於支離騖於虛高率以爲聖人之道必不可至而甘於其質之所便日以淪於汚下有從而求之者競相嗤訕曰狂誕不自量者也嗚呼其弊也豈亦一朝一夕之故哉孟子云徐行後長者謂之弟疾行先

長者謂之不弟夫徐行者豈人所不能哉所不爲也世之人不知咎其不爲而歸咎於其不能其亦不思而已、

八　文戒示門人　　汪　堯峰

昌明博大盛世之文也煩促破碎衰世之文也顚倒詖謬亂世之文也今幸值右文之時而後生爲文往往昧於辭義叛於經旨專以新奇可喜嚮然自命作者嗟乎人文與天文地文一也日月星辰天之文也山川草木地之文也假令如日夜出兩月竝見日中斗又令山湧川鬪桃冬花李冬實夫豈不震耀耳目超於常見習聞之外其可喜孰甚焉而經史書之不曰新而曰妖不曰奇而曰變然則今之化者專主於新奇可喜倘亦會南豐所謂亂道朱晦翁所謂文中之妖與文中之賊是也

九　送汪舟次之贛檢序　　魏　叔子

古學校爲公卿大夫守令所自出人才盛衰天下治亂之故莫不權輿於此故學官重得人在昔盛時有學官入爲編脩侍講讀者而襲翊以學行爲大臣特薦乃授太倉學官劉亭年八十辭職天子爲之臨踏故其時人才特盛公卿守令多賢者天下又安其衰也循例而官循例而罷率以昏耄貪鄙者當之然人才必出於學校其官猶重及夫進仕之途紛然各出則官愈輕而居官者益不務其職

左ノ三首ノ內一首ノ訓點解釋

一〇　送李少府貶峽中王少府貶長沙　　唐　高　適

嗟君此別意何如駐馬銜盃問謫居巫峽啼猿數行淚衡陽歸雁幾封書青楓江上秋天遠白帝城邊古木疎聖代即今多雨露暫時分手莫躊躇

一一　憶　昔　　唐　韋　莊

昔年曾向五陵遊午夜清歌月滿樓銀燭樹前長似晝露桃花下不知秋西園公子名無忌南國佳人字莫愁今日亂離俱是夢夕陽唯見水東流

一二　遊山西村　　宋　陸　游

莫笑農家臘酒渾豐年留客足鷄豚山重水複疑無路柳暗花明又一村簫鼓追隨春社近衣冠簡朴古風存從今若許閒乘月拄杖無時夜扣門

左ノ三首ノ內一首ノ訓點解釋

一三　郡城送友人　明　李攀龍

西來山色滿城頭東望漳河入檻流傲吏歲時頻臥閣故人風雨一登樓亂離王粲逢多病著作虞卿老更愁君到長安相問訊誰憐五月有披裘

一四　劒門　清　高其倬

兩崖對起倒雲根邱閣全傾佛寺存千古衰興幾蠻觸一龕鐘鼓自朝昏無人戰鬼啼清晝不夜於菟到驛門蜀道荒涼身萬里不聞鈴雨亦消魂

一五　雲棲　清　程夢星

靈山結想十年前一路穿雲許問禪人綠鬢眉全是竹晴暄風雨總因泉地高偏覺泣聲近峰遠猶將梵唄傳吟盡夕陽歸較晩清池應愛遠公蓮

作文課

左ノ三題ノ內一題ヲ選ブベシ

一　溫故知新說

二　送友人之清國序

三　某縣中學記

第二回　國語科（明治十九年）

解釋課

一　源氏物語乙女卷夕霧君入學の條

事はて、罷（マカヅ）出る博士才人どもめして又々文作らせ給ふ上達部殿上人もさるべき限をば皆留め侍はせ給ふ博士の人々は大臣をはじめ奉りて世く作り給ふ、興ある題の文字えりてもんざう博士奉る短きころの夜なれば明けはて、ぞ講ずる左中辨講じ仕う奉るかたちいと清げなる人のこわづかひものしくかんさびて讀みあげたる程いとおもしろしおぼえ心ことなる博士なりけりかゝるたかき家に生れ給ひて世界の榮花にのみ戲れ給ふべき御身をもちて窓の螢をむつび枝の雪をならし給ふ志の勝れたるさまを萬の事によそへなずらへて心々に作り集めたる句ことにおも

しろく唐土にももてわたり傳へまほしげなる世の文どもなりとなんそのころ世にめでゆすりける

二　枕草子かたはらいたきもの

まらうどなどにあひて、物いふにおくのかたにうちとけごと人のいふをせいせできくこゝちおもふ人のいたくゐたるをきゝゐたるをも知らで人のうへいひたるそれは何ばかりならぬつかひ人なれどかたはらいたし旅だちたる所ちかき所などにてげすどものざれかはしたるにくげなるちごをおのれがこゝちにかなしとおもふまゝにうつくしみあそばしこれがころのまねにていひける事などかたりたるさえある人のまへにてざえなき人の物おぼえがほに人の名などいひたることによしともおぼえぬわがうたを人にかたりきかせて人のほめし事などいふもかたはらいたしひとのおきて物がたりなどするかたはらにあさましううちとけてねたる人まだねもひきとゝのへぬ琴を心一つやりてさやうのかたしりつる人のまへにてひくいとゝしうすまぬむこのさるべき所にて忘うとに逢ひたるゝ

三　徒然草十二段

同じ心あらん人としめやかに物語してをかしき事も世のはかなき事もうらなく言ひ慰まんこそ嬉しかるべきにさる人あるまじければつゆ違はざらんとむかひゐたらん獨りある心地やせん互にいはんほどの事をばげにと聞くかひある物からいさゝかも違ふ所もあらん人こそ我わさやは思ふなど爭ひにくみさるからさぞとうち語らはゞつれづれなぐさまめとおもへどげにはすこしかこつ方もわれとひとしからざらん人い大方のよしなしごといはんほどこそあらめまめやかの心の友にははるかに隔たる所のありぬべきぞわびしきや

四　十六夜日記初段の内

をしからぬ身一つはやすくおもひすつれども子を思ふ心のやみはなほしのびがたく道をかへり見るうらみはやらむ方なくさてもなほあづまの鏡にうつさばくもらぬ影もやあらはるゝとせめておもひあまりてよろづのはゞかりを忘れ身をえうなき物になしはてゝゆくりもなくいさよふ月にさそはれいでなむとぞおもひなりぬるさ

りとて文屋の康秀がさそふ水にもあらずすむべき國もとむるにもあらず頃はみふゆたつはじめのさだめなき空なればふりみふらずみ時雨もたえずあらしにきほふ木の葉さへ涙と共にみだれちりつゝ事にふれて心ぼそく悲しけれど人やりならぬ道なればいきうしとてもとゞまるべきにもあらで何となくいそぎたちぬ

五　琴後集消息文

むつきばかり山里人のもとへ

年あらたまりて何事かおはすらん春の日かずもまだあさきに岡べの下もえは今しも御袖にたまる計もつみそめ給ひつや谷の戸のはつ音いつよりか御朝いのまくらをばおどろかしまゐらせたるいとなんゆかしきごいにこぞの雪のおこりにや風のけしきも冬めきて猶かすみもやらねばちまたの柳のうちけぶりゆかんほども心もとなう見え侍りさるは一年まがきのもとにうつしうゑ給へるしも雪のうちよりもいちはやくゑみさかゆとなんのたまはせし此ころこそ心ことにもにほひ出侍らめいかで一枝をと思ひ侍るをゆるしたまはましかばいとうれしうなん（歌畧す）

右ヲ俗語ニ譯文スベシ

六　泊泊舎文集消息文

山こもりしたる人にかはりてその女にかはりて

もろともにをたひきこえしをゆるさせ給はねばいかゞはせん千日の日かずもはてがたになり給ひぬらんおぼしいりたることはさることながら老人達の日ごとのやうにこひきこえさせたまふにさらぬ別のとかもいへばいとゞ心おちゐ侍らずなん過し日あらはひにおこせ給へるのふのけさもまよふ所の侍りてばりやりつればいとあやしければとてうじゐらすぞや（歌畧す）

右ヲ俗語ニ譯文スベシ

七

萬葉集巻壹幸二于吉野宮一之時柿本朝臣人麿作歌

八隅知之吾大君之所聞食天下爾國者思毛澤二雖有山川之清河内跡御心乎吉野乃國之花散相秋津乃野邊爾宮柱太敷座波百磯城乃大宮人者船並氏旦川渡舟競夕河渡此川乃絶事奈久此山乃彌高良之珠水激瀧之宮子波見禮跡不飽可聞

反歌

雖見飽奴吉野乃河之常滑乃絶事無久復還見牟

八　萬葉集卷三山部宿禰赤人望二不盡山一作歌

天地之分時從神佐備而高貴寸駿河有布士能高嶺乎天原振放見者度日之陰毛隱比照
月乃光毛不見白雲母伊去波伐加利時自久曾雪者落家留語告言繼將往不盡能高嶺者

反歌

田兒之浦從打出而見者眞白衣不盡能高嶺爾雪者零家留

九　古今和歌集

(い)　春歌

さくらの花のちりけるをよめる

つらゆき

ことならば咲かずやあらぬ櫻花みる我きへにしづ心なし

(ろ)　戀歌

たちばなのきよきがしのびにあひ去れりける

よみ人しらず

女のもとよりおこせたりける

思ふどちひとりひとりが戀しなば誰によそへてふち衣きん

設問課

○かなづかひ

一　鶏、蛙、雀、鼠、瓦、器、杖、笛、苗、竿、

右、十字に訓をつくべし

二　等はは、きなるをはうきとも書くは如何なるゆゑぞ

○てにをは

三　春毎に心をそむる花の枝に誰がなほざりの袖やふれつる

四　故里へゆく人あらばことづてんけふ鶯の初音きゝしと

右二首の歌のあやまりを直すべし

五　○作用言の中の四段言を命令につかふ時はいかなるいひかたにするかまた四段言の

命令のいひかたはてにをはの結び辞となることありや

作文課

一　某學校の記
二　和文を敎ふる順序を論ず
三　和文を人にすゝむる書翰

第二回　漢文科　（明治十九年）

作文課

一　某縣地誌序
二　某縣某地新道記
三　某學校卒業式記

四　有治人無治法論　荀子君道篇
五　立志說
六　學如不及說　論語泰伯篇

解釋課

一　孟子

孟子曰欲貴者人之同心也人々有貴於己者弗思耳人之所貴者非良貴也趙孟之所貴趙孟能賤之詩云既醉以酒既飽以德言飽乎仁義也所以不願人之膏粱之味也令聞廣譽施於身所以不願人之文繡也

二　左傳

五年春公將如棠觀魚者臧僖伯諫曰凡物不足以講大事其材不足以備器用則君不舉焉君將納民於軌物者也故講事以度軌量謂之軌取材以章物采謂之物不軌不物謂之亂政亂政亟行所以敗也

三　戰國策

說秦王書十上而說不行黑貂之裘敝黃金百斤盡資用乏絕去秦而歸羸縢履蹻負書擔囊形容枯槁面目黧黑狀有愧色歸至家妻不下紝嫂不爲炊父母不與言蘇秦喟然嘆曰妻不以我爲夫嫂不以我爲叔父母不以我爲子是皆秦之罪也乃夜發書陳篋數十得大公陰符之謀伏而讀之簡練以爲揣摩讀書欲睡引錐自刺其股血流至足曰安有說人主不能出其金玉錦繡取卿相之尊者乎期年揣摩成曰此眞可以說當世之君矣

四　五代史王彥章傳

龍德三年夏晉取鄆州梁人大恐宰相敬翔顧事急以繩內靴中入見末帝泣曰先帝取天下不以臣爲不肖所謀無不用今彊敵未滅陛下棄忽臣言臣身不用不如死乃引繩將自經末帝使人止之問所欲言翔曰事急矣非彥章不可末帝乃召彥章爲招討使以段凝爲副末帝問破敵之期彥章對曰三日左右皆失笑彥章受命而出馳兩日至滑川置酒大會陰遣人具舟於楊村命甲士六百皆持巨斧載冶者具鞴炭乘流而下彥章會飲酒半佯起更衣引精兵數千沿河以趨德勝兵舉鎖燒斷之因以巨斧斬浮橋而彥章引兵急擊南城浮橋斷南城遂破蓋三日矣

五　通鑑唐記

甲寅上問侍臣創業與守成孰難房立齡曰草昧之初與群雄並起角力而後臣之創業難矣魏徵曰自古帝王莫不得之於艱難失之於安逸守成難矣上曰玄齡與吾共取天下出百死得一生故知創業之難徵與吾共安天下常恐驕奢生於富貴禍亂生於所忽故知守成難然創業之難既已往矣守成之難方當與諸公愼之玄齡等拜曰陛下及此言四海之福也

六　答李翊書　　唐　韓愈

抑不知生之志斷勝於人而取於人邪將至於古之立言者邪斬勝於人而取於人則固勝於人而可取人於矣將斷至於古之立言者則無望其速成無誘於勢利養其根而竢其實加其膏而希其光根之茂者其實遂膏之沃者其光曄仁義之人其言藹如也

七　送東陽馬生序　　明　宋濂

當余之從師也負篋曳屨行深山巨谷中窮冬烈風大雪深數尺足膚皸裂而不知至舍四支僵勁不能勤勝人持湯沃灌以衾擁覆久而乃和寓逆旅主人日再食無鮮肥滋味之享同舍生皆被綺繡戴朱纓寶飾之帽腰白玉之環左佩刀右佩容臭燁然若神人余則縕袍敝衣處其間略

無艶意以中有足樂者不知口體之奉不若人也

八　與人書　　清　顧炎武

人之爲學不日進則日退獨學無友則孤陋而難成久處一方則習染而不自覺不幸而在窮僻之域無車馬之資猶當博學審問古人與稽以求其是非之所在庶幾可得十之五六若既不出戶又不讀書則是面墻之士雖子羔原憲之賢終無濟於天下子曰十室之邑必有忠信如丘者焉不如丘之好學也夫以孔子之聖猶須好學今人可不勉乎

九　閻典史傳　　清　邵長蘅

時大軍薄城下者已十萬列營百數四面圍數十重引弓仰射頗傷城上人而城上礧礮機弩乘高下大軍殺傷甚衆乃架大礮擊城城垣裂應元命用鐵葉裹門板貫鐵絙護之取空棺實以土障隤處又攻北城北城穿下令人運一大石塊於城內更築堅壘一夜成會城中矢少應元乘月黑束藁爲人人竿一燈立陴院間匝城兵士伏垣內擊鼓叫噪若將縋城斫營者大軍驚矢發如雨比曉獲矢無算

第三回　國語科　（明治二十年）

設問課

○假名づかひ

一　短、虹、梶、躑躅、蚯蚓、法師、格子、

右、訓の假名をつくべし

二　小路ハ古來こうぢと書き日向ハ古來ひうがと書く

右、何故にうと書きてふとは書かぬか其說明をすべし

○てにをは

三　思ふ事千枝にや繁し呼子鳥ゑのだの森の方に鳴くなる

四　出づるとも入るともなくて足引の山の尾上にすめる月かな

右、二首の歌のあやまりを指點して其正誤をつくべし

○作用言

五　はたらかす、生く、

右、二語何段の活用といふ事を説明すべし

作文

一　女學校創立の記

二　和漢學教授法の論

三　史をすゝむる書翰

解釋課

一　伊勢物語八十五段

むかし男ありけり、わらはよりつかうまつりける君御ぐしおろしたまうてけり、む月にはかならずまうでけり、たほやけのみやづかへしければつねにはえまうでずされどもとの心うしなはでけるになん有ける、昔つかうまつりし人俗なる禪師なるあまたまゐ

りあつまりて睦月なればことだつとておほみきたまひけり、雪こぼすがごとくふりてひねもすにやまずみな人ゑひて雪にふりこめられたりといふを題にて歌有りけり

おもへども身をし分ねばめがれせぬ雪のつもるぞわがこゝろなる

とよめりければみこいといたうあはれがりたまうて御ぞぬぎてたまへりけり

二　枕草子

すさまじきもの

晝ほゆる犬春の網代、三四月の紅梅のきぬ、ちごのなくなりたるうぶ屋、火おこさぬ火桶、すびつ、牛にくみたる牛かひはかせのうちつゞき女子うませたるかたたがへにゆきたるにあるじせぬところ、まして節分はすさまじ、人の國よりおこせたる文の物なき京のをもさこそはおもふらめどもされどそれはゆかしき事をも書きあつめ世にあることをきけばよし、人の許にわざときよげに書きたて、やりつる文の返事見ん今はきぬらんかしとおやしくおそきと待ほどに有つる文の結びたるも堅ぶみもいとくきたなげにもちなしふくだめてうへに引たりつる墨さへきえたるをにこせたりけりはしまさ

ざりけりともしい物忌とて取いれずなどもてかへりたるいとわびしくすさまじ又かならずくべき人の許に車をやりてまつに入くるおとすればさなりと人々出で見るに車やどりに入てながえほうとうちおろすをいかなるぞととへばけふはおはしまさずわたり給はずとて牛のかぎりひきいでいぬる」

三　徒然草五十六段

久しくへだゝりてあひたる人のわが方にありつる事數々に殘りなく語りつゞくるこそなけれへだてなくなれぬる人も程へて見るははづかしからぬかはつゝしまざまの人はあからさまに立いでゝも興ありつることていきもつぎあへずかたり興ずるぞかしよき人のものがたりするは人あまたなれどひとりにむきていふをおのづから人もきくにこそあれよからぬ人は誰ともなくあまたの中にうちいでゝみることのやうにかたりなせばみなおなじく笑ひのゝしるいとらうがはしをかしきことをいひてもいたく興せぬと興なきことをいひてもよく笑ふにぞ品のほどはかられぬべき人のみざまのよしあしさえある人はそのことなどさだめあへるにおのが身にひきかけていひいでたるいとわびし」

四　増鏡内野の雪の巻

院のうへとばどのにおはしますころ神無月の十日ごろ朝覲の行幸し給ふ世にあるかぎりのかんだちめ殿上人つかうまつるいろ〳〵の菊もみぢをこきまぜていみじうおもしろし女院もおはしませばはいしたてまつり給ふを大きおとゞみたてまつり給ふによろこびの涙ぞ人わろきほどなる」

ためしなきわが身よいかにとしたけてかゝるみゆきにけふつかへつる

げにおほかたの世につけてだにめでたくあらまほしき事どもをわが御するぞと見給ふおとゞのこゝちいかばかりなりけん」こしかたもためしなきまでこまもろこしのにしきあやをたちかさねたり」大きおとゞばかりぞねびたまへればうらおもて左ろきあやの下がさねをきたまへるしもいとゞめでたくなまめかし」

五　琴後集

人の訪へる後におくる書

をとつ日はむぐらがもとをとはせ給ひてゆくりなく御物語きこえうけ給はりしはいとうれしうなんとはせ給へるをぢ御こたへとくきこえさせつべきを老ばけ侍るみの病さへ加はりてはかばかしうものし侍らざりしはいとなめげなるわざになむのたまひし事ども忝づかに考へ侍るにまづは御心もちひのくはしき御學のひろきさらにたぐひあるまじうおはすることそめづらかなれおのれがかどなく心のおくれたるに今はよろづにものわすれがちなればとはせ給ふことありともかしこき御耳をひろむべきとも何か侍らむされど御詞はそむかじとおもひ侍ればあらぬひがごとをひとつふたつ忝りへにかいつけ侍り猶申すことたがひ侍らんをばさらにかへさひをしへ給はらんことをこそあらまほしけれあなかしこ〳〵

右ヲ俗通ノ書簡文ニ譯スベシ

六　北邊文集

賀茂季鷹が江戸に居けるにおこせたる書の返事

かしこまりて承りぬのたまはせたるやうに物ごとにあらたまりぬるほどにとかくうちまぎれ侍りて久しう聞えさせず侍り此頃上總とかへ下らせたまへるよしをも御文にてなん承りつる珍らしくたいめせさせ給ひていかにうれしうおもほしつらん平かに歸らせ給ひけるをなんよろこび侍る其御使にとてむらさい海苔給はせたるは淺草の淺からずなん入江法橋は去年の冬上りきてよりこゝちあしとてまじらひもせられざめれば久しうたいめし侍らず實には〻さゝかしこまるべき事の侍りて籠り居たるなりとかみそかに人のいひきかせて侍るはそらごとにや侍らむ委しくは玄り侍らす老いたる父は平かに侍る御ことづては言聞かせて侍りぬ道遠く年へだゝりぬるを忘れずとはせ給へるをそ深くよろこび侍る聞えさせまほしきこと多く侍れどまた使まつらん時とてとゞめ侍りぬあなかしこ〳〵

右ヲ俗通ノ書簡文ニ譯スベシ

七　萬葉集卷一

安見知之吾大君。神長柄。神左備世須登。芳野川。多藝津河内爾。高殿乎。高知座而。上立。國見乎爲波。疊有。青垣山。山神乃。奉御調等。春部者。花插頭持。秋立者。

黃葉頭刺理。遊副河之。川之神母。大御食爾。仕奉等。上瀨爾。鵜川乎立。下瀨爾。
小網刺渡。山川母。依低奉流。神乃御代鴨。

反　歌

山川毛。因而奉流。神長柄。多藝津河内爾。船出爲加母。

八　萬葉集卷三

長皇子遊二獵獵路池一之時柿本朝臣人麿作歌

八隅知之。吾大王高光吾日之皇子乃。馬並而。三獵立流。弱薦乎。獵路乃小野爾。
十六社者。伊波比拜目。鶉己曾。伊波比回禮。四時自物伊波比拜。鶉成伊波比毛等
保理。恐等付奉而。久堅乃。天見如久。眞十鏡仰而雖見。春草之益目頬四寸。吾
於富吉美可聞。

反　歌

久堅之。天歸月乎。網爾刺。我大王者。蓋爾爲有。

九　古今和歌集夏歌

うづきにさけるさくらをみてよめる　紀としさだ

哀てふことをあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらん

一〇　同　秋歌

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

うるし時花まちどほにありし菊うつらふ秋にあはんとや見れ

第三回　漢文科（明治二十年）

大江千里

文題

一　某氏農書序

二　觀練兵記

右ノ内一題ヲ選ムヘシ

解釋課

一　天降大任章

孟子

孟子曰舜發於畎畝之中傅說舉於版築之間膠鬲舉於魚鹽之中管夷吾舉於士孫叔敖舉於海百里奚舉於市故天將降大任於是人也必先苦其心志勞其筋骨餓其體膚空乏其身行拂亂其所爲所以動心忍性曾益其所不能人恒過然後能改困於心衡於慮而後作徵於色發於聲而後喻入則無法家拂士出則無敵國外患者國恒亡然後知生於憂患而死於安樂也

二　贈崔復州序

韓愈

有地數百里趨走之吏自長史司馬已下數十人其祿足以仁其三族及其朋友故舊樂乎心則一境之人喜不樂乎心則一境之人懼丈夫宦至刺史亦榮矣雖然幽遠之小民其足跡未嘗至城邑苟有不得其所能自直於卿里之吏者鮮矣況能自辨於縣吏乎能自辨於縣吏者鮮矣況能自辨於刺史之庭乎由是刺史有所不聞小民有所不宣賦有常而民逢無恒水旱癘疫之不期民之豐約懸于洲縣令不以言連帥不以信民就窮而斂愈急吾見刺史之難爲也崔君爲復洲其連帥則于公崔君之仁足以蘇復人于公之賢足以庸崔君有刺史之榮而無其難爲者將在於此乎愈嘗辱于公之知而舊遊于崔君慶復人之將蒙其休澤也於是乎言

三　六經論

清　王鈇

六經之書議最平而意則遠情最切而理則辨詞最該而氣則直體尤樸而文則工時而爲江河時而爲山嶽時而爲日星時而爲雲漢故六經之於文則造化也然而詭怪則不如老莊奇險則不如屈宋深核則不如管商奇放則不如荀列獨是諸子之所有一皆六經之所不屑有而其精者皆不出乎六經特其造意選詞旁見側出而傳之以險怪緯之以奧僻遂使古今才雄識淺者抉而求之檮而有之以是爲秘密而不知其比於玩物喪志也何足與論六經之大哉

第四回　國語科（明治二十一年）

作文課

一　史學の論

二　觀櫻の記

設問課

一　く（來）　す（爲）

右二つの語の活用を說くべし

二　もみぢばをさこそ嵐のはらふらんこのやまもとはあめと降るなれ

三　おのづから思ひいづともかひぞなき契りしまゝのこゝろならずば

四　日にそへてふしたちにけりわが園のたけの小杖のうぐひすのこゑ

右三首の歌の誤を指すべし

解釋課

一　枕の草紙の內

頭弁のしきにまゐり給ひて物語などし給ふに夜いとふけぬおす御物忌なるにこもるべければ丑になりなばあしかりなんとてまゐり給ひぬつとめて藏人所のかうや紙ひきかさねて後のあしたは殘り多かる心ちなんする夜をとほして昔物語もきこえあかさんとせしを鳥の聲に催されていとみじう清げにうらうへに事多くかき給へる

いとめでたし御返りにいと夜深く侍ける鳥の聲はまうさう〳〵くんのにやときこえたればたちかへりまうさうくんのにはとりは函谷關を開きて三千の客わづかにさりといふはあふさかの關の事なりとあれば、

夜をこめて鳥のそらねははかるとも

世にあふさかのせきはゆるさじ

心かしこき關守侍るめりときこゆたちかへり

あふさかは人こえやすき關なれば

鳥もなかねどあけてまつとか

とありし文どもをはじめのは僧都の君のぬかをさへつきて取給ひてき後〳〵のはまへにてさて逢坂の歌はよみへされて返しもせず成にたるいとわろしとわらはせ給ふさて其文は殿上人みな見てしはとのたまへばまことにおぼしけりとはこれにてこそしりぬれめでたき事など人のいひつたへぬはかひなきわざぞかし又みぐるしければ御文はいみじくかくして人に露みせ侍らぬ心ざしのほどをくらぶるにひとしうこ

そはといへばかう物思ひしりていふこと猶人々にはにずおもへど思ひくまなくあしうしたりなど例の女のやうにいはんとこそ思ひつるにとていみじう笑給。以下畧

二　續日本紀寶龜二年二月弔二賻左大臣正一位藤原朝臣永手一詔

藤原左大臣爾詔大命乎宣大詔命座詔久大臣明日者參出來仕止待比賜間爾休息安麻利豆參出末須事波無之帝天皇朝乎置而罷退止聞看而於母富久於與豆禮加多波許止乎加云信爾之有者仕奉之大政官之政乎波誰任之加罷伊麻須孰授加罷伊麻須恨加悲加朕大臣誰爾加我語比佐氣牟執爾加我問比佐氣牟止悔彌惜彌痛彌酸彌大御泣哭之座止詔大命乎宣悔加惜加自今日者大臣之奏之政者不聞看夜成牟自二明日一者大臣之仕奉儀者不看行夜成牟月日累往麻爾悲事乃未之彌可起加歲時積往麻爾佐夫之岐事乃未之彌可益加朕大臣春秋麗色波誰俱加見行弄賜牟山川淨所者孰俱可見行阿加良閉賜止歎賜比憂賜比大座座止詔大事乎宣」

美麻之大臣乃萬政總以無怠緩事無曲傾事久王臣等乎彼此別心無普平奏比公民之上乎廣厚慈而奏事此耳不在天皇朝乎暫之間罷出而休息安布事無食國之政乃平善可在狀天下公民之息安麻流倍伎事乎旦夕夜日不云思議奏比仕奉者欵美明美意太比之美多能母志美思保之川川大座座間爾忽朕朝乎離而罷麻之奴禮婆言牟須部母無爲牟須部母不知爾悔備賜比和備賜比大座座止詔大命乎宣○以下畧

三　日本紀舒明天皇九年條

是歲蝦夷叛以不レ朝、即拜二大仁上毛野君形名一爲二將軍一令レ討、還爲二蝦夷一見レ敗、而走入レ壘、遂爲レ賊所レ圍、軍衆悉漏城空之、將軍迷不レ知レ所レ如、時日暮踰レ垣欲レ逃、爰形名君妻歎曰、慷哉、爲二蝦夷一將レ見レ殺、謂レ夫曰、汝祖等、渡二蒼海一跨二萬里一、平二水表政一、以二威武一傳二於後葉一、今汝頓屈二先祖之名一、必爲二後世一見レ嗤即酌レ酒强之飲レ夫、而親佩二夫之劒一、張二十弓一、令二女人數十一、俾レ鳴レ弦、既而夫更起之、取二伏仗一而進レ之、蝦夷以爲軍衆猶多、而稍引退之、於レ是散卒更聚、亦振旅焉、擊二蝦夷一大敗以悉虜

右ヲ和文ニ譯スベシ

第四回　漢文科　（明治二十一年）

文題

一　讀普法戰記

二　某縣某學記

解釋課

一　論語

子張問行子曰言忠信行篤敬雖蠻貊之邦行矣言不忠信行不篤敬雖州里行乎哉立則見其參於前也在輿則見其倚於衡也夫然後行子張書諸紳

二　黃仙嶠詩序

古之君子所以自拔於人々者豈有他哉亦其器識有不可量度而已矣試之以富貴貧賤而漫焉不加喜戚臨之以大憂大辱而不易其常器之謂也智足以析天下之微芒明足以破一隅之固識之謂也器與識及之矣而施諸事業有不逮君子不深譏焉器識之不及而求小成於事業末矣事業之不及而求有當於語言文字抑又末矣故語言文字者右之君子所偶一涉焉而不齒諸有亡者也

清　曾國藩

三　史記

田單乃收城中得千餘牛爲絳繪衣畫以五采龍文束兵刃於其角而灌脂束葦於尾燒其端鑿城數十穴夜縱牛壯士五千人隨其後牛尾熱怒而奔燕軍燕軍夜大驚牛尾炬火光明炫耀燕軍視之皆龍文所觸盡死傷五千人因衝枚擊之而城中鼓譟從之老弱皆擊銅器爲聲聲動天地燕軍大駭敗走齊人遂夷殺其將騎劫燕軍擾亂奔走齊人追北所過城邑皆畔燕而歸田單兵日益多乘勝燕日敗亡卒至河上而齊七十餘城皆復爲齊

第五回　國語科　（明治二十四年）

解釋課

一　源氏物語帚木の巻品定めの末段

すべて男も女もわろものはわづかにそれるかたのことをのこりなくみせつくさんと思へるこそいとをしけれ三史五經の道〳〵さきかたをあきらかにさとりあかさんこそあいきやうなからめなどかは女といはんからに世にあることのおほやけわたくしにつけてむげにそらずいたらずしもあらんわざとならひまなばねどもすこしもかどあらん人のみゝにも目にもとまるとじねんにおほかるべしさるまゝにはまんなをはしりがきてさるまじきどちの女ぶみになかばすぎてかきすくめたるあなうたてこのかたのたをやかならましかばとみゆかし心ちにはさしもおもはざらめどおのづからこはゞ〳〵しきこゝろによみなされなどしつゝことさらびたりこれは上らふの中にもおほかることぞかし歌よむと思へる人のやがて歌にまつはれをかしきふることをもはじめよりとりこみつゝすさまじきをり〳〵よみかけたるこそ物しきことなれかへしせねばなさけなしえせざらん人ははしたなからんさるべき節會など五月のせちにいそぎまゐるあしたなにのあやめも思ひえづめられぬにえならぬねをひきかけ九日の

えんにまづかたき詩の心をおもひぐめらしいとまなきをりにきくの露をかこちよせなどやうのつきなきいとなみにあはせさならでもおのづからげにのちにおもへばをかしくも哀にもあゝべかりけることのそのをりにつきなくめにもとまらぬなどをおしはからずよみいでたる中々心おくれてみゆよろづのことになどかはさてもとおぼゆるをりから時〳〵思ひわかぬばかりの心にてはよしばみなさけだたざらんなんめやすかるべきすべて心にえれらん事をもえらずがほにもてなしいはまほしからんことをもひとつふたつのふしはすぐすべくなんあゝべかりける、

右を注解すべし

二　萬葉集

勇士の名を振ふことを慕ふ歌

山上憶良

ますらをは名をしたつべし後の世に聞つぐ人もかたりつぐがに

三　古今集

(い)　藤原の三善が六十の賀によみける

在原滋春

つる龜もちとせの後はさらなくに、あかぬ心にまかせはてん

紀としさだ

同

(ろ)　卯月にさける櫻を見てよめる

あはれてふ事をあまたにやらじとや春におくれてひとり咲くらん

四　後拾遺集

(い)　小式部内侍なくなりてうまごどもの侍りけるを

みてよみ侍ける

とゞめおきてたれをあはれと思ふらん、こはまさるらんこはさまりけり、

和泉式部

五　新古今集

花みにと人やりならぬ野べに來て心のかぎりつくしぬるかな

大納言經信

右五首を注解すべし

六　日本書紀卷九神功皇后征韓條

冬十月己亥朔辛丑、從二和珥（ワニ）ノ津一發之時、飛廉（カゼノカミ）起レ風、陽侯（ウミノカミ）擧レ浪、海中大魚、悉浮挾レ船、則大風順吹、帆船隨レ波、不レ勞二檝楫一便到二新羅一時、隨レ船潮浪遠逮二國中一、中略新羅王遙望以爲、非常之兵將レ滅二己國一、警焉失レ志、乃今醒之曰、吾聞東有二神國一謂二日本一、亦有二聖王一謂二天皇一、必其國之神兵也、豈可二擧レ兵以拒一乎、即素旆而自服、素組以面縛、封二圖籍一降二於王船之前一、因以叩頭之曰、從レ今以後、長與二乾坤一伏爲二飼部一、其不レ乾二船柁一、而春秋獻二馬梳及馬鞭一、復不レ煩二海遠一、以二每年一貢二男女之調一、則重誓之曰、非四東日更出レ西、且阿利那禮（アリナレ）河返以逆流及二河石昇爲二星辰一、而殊闕二春秋之朝一、怠廢二梳鞭之貢一、天神地祇共討焉、

右を假名文に譯すべし

作文課

大風の記

設問課

一　左の歌についててにをはの調不調を説明すべし

(い)　つくばねの峰までかゝる雲を君しもよそにみるは何なり

(ろ)　春がすみたなびく田居にいほりしてあき田かるまで思はしむらく

二　左の歌についてうすみとふりみふらずみとの區別を説明すべし

(い)　春のきるかすみのころもきぬをうすみやま風にこそみだるべらなれ

(ろ)　神無月ふりみふらずみさだめなき去ぐれぞ冬のはじめなりける

三　左の歌について過去現在などいふ時の調不調を説明すべし

(い)　花見にとゆかましものを春がすみたなびく山のかひなかりけり

(ろ)　誰が方になびきはてゝかふじのねのけぶりの末のみえずなるらん

四　左の歌についてははのはゝ清濁いづれにすべきかを説明すべし

(い)　みちのくにありといふなるなとり川なき名とりてはくるしかりけり

(ろ)　うめが香を袖にうつしてとゞめてば春はすぐともかたみならまし

○

第五回　漢文科　（明治二十四年）

右答案の末に熟讀及び看過せし語學書名を列記すべし

解釋課

一　博施濟衆章　論語

子貢曰如有博施於民而能濟衆何如可謂仁乎子曰何事於仁必也聖乎堯舜其猶病諸夫仁者己欲立而立人己欲達人能近取譬可謂仁之方也已

二　蘇秦列傳　史記

蘇秦爲從約長幷相六國北報趙王乃行過雒陽重騎輜重諸侯各發使送之甚衆擬於王者周顯王聞之恐懼除道使人郊勞蘇秦之昆弟妻嫂側目不敢仰視俯伏侍取食蘇秦笑謂其嫂曰何前倨而後恭也嫂委蛇蒲服以面掩地而謝曰見季子位高金多也蘇秦喟然歎曰此一人之身富貴則親戚畏懼之貧賤則輕易之況衆人乎且使我有雒陽負郭田二頃吾豈能佩六國相印乎

三　答崔立之書　　韓愈

方今天下風俗尚有未及於古者邊境尚有被甲執兵者主上不得怡而宰相以爲憂僕雖不賢亦且潛究其得失致之乎吾相薦之乎吾君上希卿大夫之位下猶取一障而乘之若都不可得猶將畊於寬閑之野釣於寂寞之濱求國家之遺事考賢人哲士之終始作唐之一經垂之於無窮誅奸諛於既死發潛德之幽光二者將必有一可

作文課

興一利不如除一害說

第六回　國語科（明治二十六年）

解釋課

一　源氏物語等木品定の内

大方の世につけてみるにも咎なきも我が物とうち頼むべきを選ばんに多かる中にもえなん思ひ定むまじかりける男子の公につかうまつりはかばかしき世の固めなるべき眞の器となるべきをとり出さんには難かるべしされどかしこしとても一人二人世の中をまつりごち知るべきならねば上は下に助けられ下は上に靡きて事廣きに譲らふらん狭き家の内のあるじとすべき人一人を思ひ廻らすに足らはで惡しかるべき大事どもなんかたがた多かるとあればかゝりあふさきるさにて斜にさても有りぬべき人の少きをすきずきの心のすさびにて人の有樣を數多見合せんの好ならねど偏に思ひ定むべきよるべとずばかりに同じくは我が力入りをし引つくろふべき所なく心にかなふやうもやと選りそめつる人の定り難きなるべし、

右の大意を注解すべし

二　大鏡八卷の内

六條の式部卿の宮と申しゝは延喜の帝の一腹の御兄弟におはします野の行幸せさせ給ひしに此宮つかうまつらせ給ふべかりけれど京の程遥參せさせ給へりしかば桂の里にぞ參りあはせ給へりしかば御輿とどめて先だて奉らせ給ひしに某といひし犬飼

の犬の前足を二つながら肩に引こして深き河の瀬渡りしこそ行幸につかうまつり給へる人々さながら興じ給はぬなく帝も興ありげにおぼしたる御氣色にこそみえおはしましゝかさて山口入らせ給ひし程に白兄と云し御鷹の鳥をとりながら御輿の鳳の上に飛び參りて侍らひしやうやう日は山の端に入がたに光のいみじうさして山の紅葉錦を張りたる樣なるに鷹の色はいと白くて雉子は紺青の樣にてはね打廣げてゐて侍らひし程は實に雪少し打散りて折ふしとり集めてさる事やはさふらひし

右を漢語交りの通行文に譯すべし

三　萬葉集

西海道の節度使藤原の宇合を送るとて高橋の蟲麿がよめる歌

千萬の軍なりとも言擧げせず取りて來ぬべき男子とぞ思ふ

四　古今集　紀　貫之

櫻の花の散りけるをよめる

ことならば咲かずやはあらぬ櫻花みる我さへにうづこゝろなし

五　新古今集　長　明

月前松風

ながむれば千々に物思ふ月にまた我が身ひとつの峰の松風

右三首の歌の意を述ぶべし

設問

一　左の歌についてにをはの調不調を說明すべし

(い)　人よりもこゝろのかぎりながめてもつる月はたれともわかじものゆゑ

(ろ)　ほとゝぎす峰の雲にやまじりにしありとはきけどみるよしもなき

二　左の文について詞づかひの調不調を說明すべし

(い)　玉はたとひ龍のあぎとにみいでつるとも得べき術のなからましかばいかでかはそのかひあらん

(ろ)　硯もかわかせず夜毎に手ならふまゝにいつしか消息をもかよはすほどになり

にけり

三　左の文について時または自他などの調不調を説明すべし

(い)　かの神龍をとらへては我また害せられなましよくこそとらへ得ずはなりにけれ

(ろ)　和歌はひとつこゝろを種としてよろづのことのはとぞなれりける

右答案の末に熟讀および看過せし語學書の書名を列記すべし

文題

旅行の記

第六回　漢文科　（明治二十六年）

一　書經

天叙有典勅我五典五惇哉天秩有禮自我五禮有庸哉同寅協恭和衷哉天命有德五服五章哉天討有罪五刑五用哉政事懋哉々々天聰明自我民聰明天明畏自我民明威達于上下敬哉有土

二　老子

夫我有三寶持而寶之一曰慈二曰儉三曰不敢爲天下先慈故能勇儉故能廣不敢爲天下先故能成器長今捨慈且勇捨儉且廣捨後且先死矣夫慈以戰則勝以守則固天將救之以慈衛之

三　荀子

積土成山風雨興焉積水成淵蛟龍生焉積善成德而神明自得聖心備焉故不積蹞步無以至千里不積小流無以成江河騏驥一躍不能十步駑馬十駕功在不舍鍥而舍之朽木不折鍥而不舍金石可鏤

作文

尚儉說

第七回　國語科　（明治二十七年）

解釋

一　宇治拾遺物語卷十　堀河院明暹に笛ふかせ給ふ事

これも今はむかし堀河院の御時奈良の僧どもを召して大般若の御讀經たこなはれけるに明暹この中にまゐる其の時に主上御笛をあそばしけるがやうやうに調子をかへてふかせ給ひけるに明暹調子ごとに聲たがへずあげければ主上あやしみ給てこの僧をめしければ明暹ひざまづきて庭に候ふおほせによりてのぼりてすの子に候ふに笛やふくととはせおはしましければかたのごとくつかまつり候ふと申ければこそとて御ふえたびてふかせられけるに万歳樂をえもいはずふきたりければ御感ありてやがてその笛をたびてけり件の笛傳はりていま八幡別當幸清がもとにありとか

二　徒然草卷一

いにしへの聖の御代の政をもわすれ民のうれへ國のそこなはるゝも知らず萬にきよらを盡していみじと思ひ所せきさまにしたる人こそうたて思ふ所なく見ゆれ衣冠より馬車にいたるまで有るに𢌞たがひて用よ美麗をもとむる事なかれとぞ九條殿の遺誡にも侍る順徳院の禁中の事共かゝせ給へるにもおほやけのたてまつり物はおろそかなるをもてよしとすべからこそ侍れ

三　古今集春下

山高み見つゝわがこしさくら花風は心にまかすべらなり

四　新古今集雜中

たれかはと思ひたえても松にのみおとづれてゆく風はうらめし

五　新葉和歌集二十賀

この宿の庭にさかゆく松が枝はあるじと共に萬代やへむ

設問

一　左の文について天爾乎波の調不調を説明すべし

「手かくわざは文字のひとつにて上代は殊にすぐれたりしをいつ頃よりや漸くすたれて今はふつに學ぶ人だになくなりにしあはれ盛衰の理はたゞ人のうへのみにはあらじかし

二　左の二種の歌について詞づかひの調不調を説明すべし

(い)　ゆくさきもみえぬ波路に船出して風にもまかす身こそうきたれ

(ろ)　法のみち去ば　ふみわけて　吉野の宮に　いりにしを　などかあらしの　おちかへり　志賀山ざくら　ちらすらん

三　左の十字に字音の假字をつくべし

氷　火　僧　章　勝　納　信　心　孝　公

四　左の四條の問に答ふべし

(い)　有りといふ作用言を何故に變格の活用といふか

(ろ)　といふ天爾乎波はいかなる時に連體言をうくるか

(は)　現在の時をあらはす作用言はいつも現在の一箇のみをあらはすか

(に)　音便の假字をいうとするはいかなる故か

右答案の末に熟讀及び看過せし語學書の名を列記すべし

作文題

一　尋常師範學校卒業生に告ぐ

二　尋常中學校卒業生に告ぐ

三　高等女事校卒業生に告ぐ

右各通行文と中古文體と兩樣

第七回　漢文科　（明治二十七年）

解釋

一　尚書　洪範

六三德一曰正直二曰剛克三曰柔克平康正直彊弗友剛克變友柔克沈潛剛克高明柔克

二　左傳　成公三年

王送知罃曰子其怨我乎對曰二國治戎臣不才不勝其任以爲俘馘執事不以釁鼓使歸即戮、君之惠也臣實不才又誰敢怨王曰然則德我乎對曰二國圖其社稷而求紓其民各懲其忿以相宥也兩釋累囚以成其好二國有好臣不與及其誰敢德王曰子歸何以報我對曰臣不任受怨亦不任受德無怨無德不知所報

（女子ニハ）文章軌範卷六袁州學記結末一段

文題

教學半說

授業法問題

一　尋常師範學校尋常中學校高等女學校ニ於テ漢文ヲ教授スル旨趣如何

二　漢文ヲ教授スル方法如何

三　世人或ハ漢文ヲ無用視スル者アリ果シテ然ルカ將タ緊要ナルカ其ノ理由ヲ說ケ

右三項詳細ニ條陳セヨ

第八回　國語科（明治二十八年）

解釋

一　野分の又の日こそいみじうあはれにおぼゆれたてじとみすいがいなどのふしなみたるにせんざいども心くるしげなりおほきなる木どもたふれ枝など吹き折られたるだにをしきに萩女郎花などのうへによろぼひはひふせるいとおもはずなりかうしのつぼなどにさときはをことさらにしたらんやうにこま〴〵と吹入たるこそあらかりつる風の去わざともおぼえね

二　曉たよりありときゝてよもすがらおきゐて都の文どもかく中にことに隔なくあはれにたのみかはしたるあね君にをさなき人々の事さまざまにかきやるほどれいの浪風はげしく聞ゆればたゞ今あるまゝの事をぞ書きつけける

夜もすがら涙もふみもかきあへず磯こす風にひとりおきゐて

又同じさまにて古郷には戀ひしのぶおとうとの屍上にもふみたてまつるとていそのなどのはしばしもいさゝかつゝみあはせて

いたづらにめかり衣ほやくすさびにも戀ひしやなれし里のあま人

三　さりとてはた身をえうなきものにはふらかしはつべきにしもあらずかくのみつたなくおろかなる心ながら何わざにまれ怠りなくわざと心にいれてつとめたらんにつひにはひとつゆゑづけてなのめに衣いづるふしもなどかはなからむとあいなだのみにかゝりてなむ

四　さうざうし　ゆふけ　ゆふげ　そばそばし　わくらはに　らうたし　らうがはし

さくじる　みづはぐむ　ほうけづく

五　（文章二篇ヲ朗讀シ受驗者ヲシテ書取ラシメ漢字ニハ一々假名ヲ施サシム朗讀ノ文ヲ左ニ掲グ）

(い)　我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にぞある昔神武天皇躬づから大伴物部の兵どもを率ゐ中國のまつろはぬものどもを討ち平げ給ひ高御座に即かせられて天下をろしめし給ひしより二千五百有餘年を經ぬ此間世の様の移り換るに隨ひて兵制の沿革も亦屢なりき

(ろ)　朕幼くして天つ日嗣を受けし初め征夷大將軍其政權を返上し大名小名其版籍を奉還し年を經ずして海内一統の世となり古の制度に復しぬ是文武の忠臣良弼ありて朕を輔翼せる功績なり歴世祖宗の專蒼生を憐み給ひし御遺澤なりといへども併我臣民の其心に順逆の理を辨へ大義の重きを知れるが故にこそあれ

設問

一　動詞自他の辨

二　テニヲハの定義を與へかつ其分類を示せ

三　維新以前の有名なる國語學者二名を擧げその畧傳と學説の一斑とを記せ

四　平安、室町、江戸各時代文學の特質を畧叙せよ

文題

一　戰死者の遺族に與ふる書

二　國語教育の要旨

國語教授法問題

一　作文の採點は如何なる標準に據るべきか

二　讀方教授の方法及び其目的

三　讀書科と作文科とは如何にして聯絡せしむべきか

四　尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校の國語科時間各々四學年間毎週四時と見做し學課目及び教科用書の配當表を作るべし

（受驗者ハ第一第二第三ノ三問ノ中其二ヲ撰ブヿヲ得）

第八回　漢文科　（明治二十八年）

解釋

一　禹曰俞哉帝光天之下至于海隅蒼生萬邦黎獻共惟帝臣惟帝時擧敷納以言明庶以功車服以庸誰敢不讓敢不敬應帝不時敷同日奏罔功

二　夫民勞則思思則善心生逸則淫淫則忘善忘善則惡心生沃土之民不材淫也瘠土之民莫不嚮義勞也是故天子大采朝日與三公九卿祖識地德日中考政與百官之政事師尹惟旅牧相宣序民事少采夕月與大史司載糾虔天刑日入監九御使潔奉禘郊之粢盛而後即安諸侯朝修天子之業命晝考其國職夕省典刑夜儆百工使無悔淫而後即安鄉大夫朝考其職晝講其庶政夕序其業夜庀其家事而後即安士朝而受業晝而講貫夕而習復夜而計過無憾而後即安自庶人以下明而動晦而休無日以怠（國語）

文題

有文事者必有武備說

第九回　國語科（明治二十九年）

解釋

一　歌よむと思へる人のやがて歌にまつはれをかしきふることをもはじめよりとりこみつゝすさまじきをもよみかけたるこそものしきことなれかへしせねばなさけなしえせざらん人ははしたなからんさるべきせちゑなど五月のせちにいそぎまねるあしたなにのあやめも思ひ去づめられぬにえならぬをひきかけ九日の宴にまづかたき詩の心をおもひめぐらしいとまなきをりに菊の露をかこちよせなどやうのつきなきいとなみにあはせさならでもおのづからげに後におもべばをかしくもあはれにもあべかりけることのそのをりにつきなくめにもとまらぬなどをおしはからずよみいでたるなか〳〵心おくれてみゆよろづのことになどかはさてもとおぼゆるをりからときどき思ひわかぬばかりの心にてはよしばみなさけだゝざらんなんめやすかるべ

二　爰に爲朝敵の勢ごしに見れば大將義朝大の男の大きなる馬には乘つたり人にすぐれて軍の下知せんとて突立ち上りたる內兜誠にいよげに見えければ願ふところの幸得たりと悅んで件の大矢をうち番ひ只一矢に射落さんと打上げけるが待てよばし弓矢取る身の謀汝は內の御方へまゐれ我は院方へ參らん汝負けば憑め助けん我まけば汝を憑まんなど約束して父子立別れてかおはすらんと思案して番ひたる矢をさしはづす遠慮の程こそ神妙なれ

三　(い)祁布與利波、可敝里見奈久豆、意富伎美乃之許乃美多豆等伊涅多都和例波

(ろ)そへにとてとすればかゝりかくすればあないひえらずあふさきるさに

四　(い)小松の御門ことにふれてきやうさくにおはします

(ろ)御ぞなどもたいけしのかにきみかへりたりあやしさに御ゆするまゐり御ぞきかへなどし給ふ

(はさては一家の郎等ざさんなれ汝を射るにあらず大將を射るなり

(に)廉恥を忘れ金銀を好み候などは沙汰の限に候

設問

一　母音、子音、促音、拗音の定義を與へよ

二　に、へ、と、の、が、も、を、のあらゆる用法を示せ

三　枕詞の性質を説き併せて之に關する參考書を列擧せよ

四　語學の發達を略叙せよ

五　左の書は如何なる事柄を記せるものぞ

歷朝詔詞解　金槐和歌集　扶桑拾葉集　藩翰譜　和漢朗詠集

六　左の人々の文學上の事蹟を問ふ

源隆國　一條兼良　北村季吟　貝原益軒　瀧澤馬琴

七　長歌、短歌、旋頭歌、今樣歌の形式を問ふ

八　書牘文體は如何にして發達せしか

作文

譯文

文治二年四月八日、二品幷御臺所、御二參鶴岡宮一、以レ次被レ召二出靜女於廻廊一、是依レ可レ令レ施二舞曲一也、此事去比被レ仰處、申二病痾由一不レ參、於二身不屑一者、雖レ不レ能二左右一、爲二豫州妾一、忽出二揭焉砌之條一、頗恥辱之由、日來內々雖レ澁二申之一、彼既天下名仁也、遠參向歸洛在レ近、不レ見二其藝一者、無念由、御臺所頻以令二勸申一給之間、被レ召レ之、偏可レ備二大菩薩冥感之旨一被レ仰云云、近日只有二別緒之愁一、更無二舞曲業一由、臨レ座猶固辭、然而貴命及二再三之間一、慈廻二白雪之袖一、發二黃竹之歌一、左衞門尉祐經鼓、是生二數代勇士之家一、雖レ繼二楯戟之基一、歷二一旬上月之職一、自携二歌次曲一之故、候二此役一歟、畠山二郎重忠爲二銅拍子一、靜先吟二出歌云、

吉野山峰ノ白雪フミワケテ入ニシ人ノ跡ゾコヒシキ

次歌二別物曲一之後、又吟二和歌一云、

シヅヤシヅ　シヅノヲダマキ　クリカヘシ　昔ヲ今ニナスヨシモガナ

第九回　漢文科　（明治二十九年）

解釋

一　曰敢問夫子之不動心與告子之不動心可得聞與告子曰不得於言勿求於心不得於心勿求於氣不得於心勿求於氣可不得於言勿求於心不可夫志氣之帥也氣體之充也夫志至焉氣次焉故曰持其志無暴其氣既曰志至焉氣次焉又曰持其志無暴其氣者何也曰志壹則動氣氣壹則動志也今夫蹶者趨者是氣也而反動其心敢問夫子惡乎長曰我知言我善養吾浩然之氣敢問何謂浩然之氣曰難言也其爲氣也至大至剛以直養而無害則塞于天地之間其爲氣也配義與道無是餒也（孟子）

二　庖丁爲文惠君解牛手之所觸肩之所倚足之所履膝之所踦砉然嚮然奏刀騞然莫不中音合於桑林之舞乃中經首之會文惠君曰譆善哉技蓋至此乎庖丁釋刀對曰臣之所好者道也進乎技矣始臣之解牛之時所見無非牛者三年之後未嘗見全牛也方今之時臣以神遇而不以目視官知止而神欲行依乎天理批大郤導大窾因其固然技經肯綮之未嘗而況大軱乎良庖歲更刀割也族庖月更刀折也今臣之刀十九年矣所解數千牛矣而刀刃若新發於硎彼節者有間而刀刃者無厚以無厚入有間恢々乎其於遊刃有餘地矣是以十九年而刀刃若新發於硎雖然每至於族吾見其難爲怵然爲戒視爲止行爲遲動刀甚微謋然已解如土委地提刀而立爲之四顧爲之躊躇滿志善刀而藏之文惠君曰善哉吾聞庖丁之言得養生焉（莊子）

作文

送某官某赴任臺灣序

教授法

一　尋常師範學校尋常中學校ニテ漢文ヲ授クル要旨如何

二　同上一年生ニ漢文ヲ授クル方法ヲ說明セヨ

第十回　國語科豫備試驗　（明治三十年）

設問（三時間）

（甲）

一　左の漢字に國訓を施せ

數　俵　鬼　簸　笈　及　楫　醉　鴟　醫　潮　敎　籤　氏　葛　屑　兎　犯　竿　蝙蝠　紫陽花

二　左の漢字に漢吳音を附しその用例を示せ

京　右　奴　行　留　圖　慧　皇　女　人　宗　男　武　定　明

三　助動詞を分類してその用例を示せ

四　本邦助辭沿革の一斑を述べよ

（乙）

五　左の人々の文學上の事蹟を問ふ

○藤原俊成　石川雅望　村田春海　藤原公任　安藤爲章

六　左の書の記載事項と編著者の名とを擧げよ

○奥の細道　花月草紙　新葉和歌集　古今著聞集　古今和歌六帖

七　連歌とは如何なるものぞ

八　元祿時代の文學の狀態を畧叙せよ

（甲）（乙）ノ答案ハ別々ニ綴ルベシ

解釋（三時間）

一　五月ばかりに月もなくいと暗き夜女房やさぶらひ給ふところどころしていへばいで見よ例ならずいふは誰ぞと仰せらるれば出でてこは誰ぞおどろ〳〵しうきはやかなるはといふに物もいはでみすをもたげてようとさし入るゝはくれ竹の枝なりけりおいこの君にこそといひたるを聞きていざやこれ殿上に行きて語らむとて中將新中將六位どもなどありけるはいぬ

二　太かた延喜の帝つねに笑ひてぞおはしましけるその故はまめだちたる人には物いひにくしうちとけたるけしきにつきてなむ人は物いひよきされば太小のことときかむが爲なりとぞおほせごとありけるそれさることなりけにくきかほには物いひふれにくきものなりさてわれいかでふつきなが月にしにせじ相撲の節九日の節のとまらむがくちをしきにとおほせられけれど九月にうせ給ひて九日の節はそれよりとまりたるなり

三（い）　世の中はいづれかさしてわがならんゆきとまるをぞやどとさだむる

（ろ）　士也母空應有萬代爾語續可名者不立之而

四　國母建禮門院を始め奉りて先帝の御乳母帥典侍大納言典侍已下の女房達船の艫舳に臥しまろびて聲を調べて叫び給ふも夥しき軍喚にぞ似たりける…あはれなる哉花に喩へし十善の御粧無常の風に匂ひを失ひ悲しい哉月にかゞやきし萬乘の玉體蒼海の浪に影を沈み御座す事を無常元來定めなし有待誰かは恃み有るなれども清涼紫宸の玉臺をふりすてゝ鬪戰兵革の船中に行幸して未だ十歳にだも滿じ給はぬ御齡に忽に波の底に入り給ひけんあはれといふも疎なり（傍線の所のみを解釋せよ）

五　靱負の佐　公卿　回錄　攝籙　亭子院のみかど　けやけき奴かな　飾磨の褐のひたゝれ　弓矢の冥加　うるはしき事よりも艶になまめかし　むくつけくおそろし

作文（二時間）

一　師道を論ず（普通文體）

二　修學旅行の記（中古文體）

第十回　漢文科豫備試驗（明治三十年）

解釋

一（い）　工尹商陽與陳弃疾追吳師及之陳弃疾謂工尹商陽曰王事也子手弓而可手弓子射諸射之斃一人韔弓又及謂之又斃二人每斃一人揜其目止其御曰朝不座燕不與殺三人亦足以反命矣孔子曰殺人之中又有禮焉（檀弓）

(ろ)　晉獻文子成室晉大夫發焉張老曰美哉輪焉美哉奐焉歌於斯哭於斯聚國族於斯是全要領以從先大夫於九京也北面再拜稽首君子謂之善頌善禱（全上）

二　湯始征自葛載十一征而無敵於天下東面而征西夷怨南面而征北狄怨曰奚爲後我民之望之若大旱之望雨也歸市者弗止芸者不變誅其君弔其民如時雨降民大悅書曰徯我后后來其無罰有攸不爲臣東征綏厥士女匪厥玄黃紹我周王見休惟臣附于大邑周其君子實玄黃于匪以迎其君子其小人簞食壺漿以迎其小人救民於水火之中取其殘而已矣太誓曰我武惟揚侵于之疆則取于殘殺伐用張于湯有光（孟子）

（答案ハ毛筆ヲ用フベシ

右四時間（此問題ヘ句ヲ施シ反リ點ヲ附スベシ
（解釋ハ別紙ニ假名交リ文ニテ成ルベク詳明ニ記スルヲ要ス

第十回　國語科本試驗　（明治三十年）

一　國學者の傳記を知らむには如何なる書を見るべきか

二　公事、衣冠、軍器のことを知らむには如何なる書を見るべきか

三　土佐日記と古今集の序とを比較評論せよ

四　讀書科教授をして最も興味あらしむる方案如何

（注意）答案ハ問題毎ニ別紙ニ記セ

（他に試驗委員の面前に於いて、藩翰譜、駿臺雜話などの一節を讀ましめて、種々の質問を試みたり。）

第十回　漢文科本試驗　（明治三十年）

教授法

一　漢文ヲ教授スルノ目的如何

■生徒ノ學力ヲ速ニ進ムル方法アリヤ

一　授業ノ課書ハ何々書ヲ以テ必要トスルカ其ノ書名ヲ記セヨ

右三項詳細に條陳セヨ（二時間）

作文

立志說

右三時間

第十一回　國語科豫備試驗　（明治三十一年）

解釋

一　鎌期の化行はれて皇后元妃の外君恩に誇る宮女甚多かりければ宮々次第に御誕生あり中にも第一の宮尊良親王は御子左大納言爲世卿の女贈從三位爲子の御腹にて志學の歳の始より大義の道に長じさせ給へりされば富緒河の清き流を汲み淺香山の故き跡を蹈みて嘯風弄月に御心を傷ましめ給ふ

二　光る源氏まだ中將などに物し給ひし時は內にのみさぶらひようし給ひておほい殿にはたえだえまかで給ふをまのぶのみだれやと疑ひきこゆることもありしかどさしもあだめきめなれたるうちつけのすきずきしさなどはこのましからぬ御本性にてまれにはあながちにひきたがへ心づくしなることを御心におぼしとゞむるくせなんあやにくにてさるまじき御ふるまひもうちまじりける

三　(い)左ノ問題ハ傍線ノ所ノミヲ解釋スベシ

近付くかたきを指つめ引つめさんざんに射る無碍に矢比は近かりけり一筋もあだ矢なく死生はまらず矢庭に射倒さるゝものこそ多かりけれ

(ろ)長政はさらぬ體にもてなし人々に色代しておのが陣にかへる

(は)柱を折りたるは博士を望みまだ折らぬはともしびの望みなんありける

(に)白地に立ち入らせ給へ

(い)とのもりのともものみやつこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな

(ろ)　さゝの葉にふりつむ雪のうれを重みもとくだちゆくわがさかりかは

設問

一　左ノ文章ニ就キテ品詞ノ種類文章ノ構造ヲ說明セヨ

見じといふ人こそうけれ山里の折かけ垣の梅をだに惜なしと惜みしに今更薪になるべしとかねて思ひきや

二　左ノ語ニ假名ヲ施シ意義ヲ說明セヨ

青侍　遠侍　年官年爵　引出物　切米　綾　桑門　御薗降　檀越　冥加

三　左ノ人名ヲ漢字ニ寫シ且ツ其時代ヲ擧ゲヨ

カタノアヅママロ　ヤマノヘノオクラ　モトヲリノノリナガ　オホトモノヤカモチ　ケイチウアジヤリ

四　左ノ書ヲ解題セヨ

うけらが花　本朝文粹　吾妻鑑　玉葉集　男信　同文通考　南留別志　安齋隨筆

菟久波集　蜻蛉日記

作文

一　文字ノ說（普通文體）

第十一回　國語科本試驗　（明治三十一年）

（受驗者をイロハ順に三分して、三日間に試驗せられたり。第一日には、源氏物語夕顏の卷の中なるかたほなるをだにめのとなどやうの思ふべき人はあさましうまほになす物を……といふ一節を講讀せしめ、次にまた太平記卷二十六中なる、（但し參考本なりしかば字句明瞭なりき。）

去程に正月五日の早旦に先づ四條中納言隆資卿大將として和泉紀伊國の野伏二萬餘人引具して色々の旗を手に差し上げ飯盛山にぞ向ひ合ふ……

の一節を讀ましめて、其の要點を試問せられ、次に簡單なる文章、或は和歌二三首を出して、其の文法上の關係など試問せられたりき。

第二日には、太平記卷十三なる、

大亂の後民弊え人苦て天下未だ安からざれば、……

の一節を讀ましめ、中につきて、要點故事等を試問せられしは前日の如く、其の次に枕草紙十二の卷の一節を（春曙抄本）を讀ませたり。即ち、

家ひろくきよげにて云んぞくはさらなり……

を講讀せしめ、古今集中の歌二三を出して、文法上の事など問ひたり。されども、こは人によりて同じからざりしが如し。

第三日には、源氏物語の末摘花の卷の中の一節を湖月抄本にてよませたり。即ち、

左衞門のめのとて大貳のあまのさしつぎにおぼいたるがむすめ大輔の命婦とて

……みつのともにていまひとくさやうたてあらむとて

といふ處を講讀せしめ、次に保元物語中の惡左府薨去の條の一節をよませたり。即ち、

竊に國史を考ふるに大臣誅を受くる事其例多し……氏長者たりながら神事疎にして威勢を慕れば我ともなはざるよし春日大明神の御託宣あり神慮の末こそ怖しけれ

をよませて、其の要點を試問し、又和歌二三を示して、其の文法を試問したり。然れども、人によりては然らざりしものもありき。要するに、三十一年度の本試驗は、全く口頭に止まり、敎授法の試問のごときは全くあらざりき。

第十一回　漢文科豫備試驗　（明治三十一年）

解釋

一　子產與范宣子論重幣書一節

僑聞君子長國家者非無賄之患而無令名之難夫諸侯之賄聚於公室則諸侯貳若吾子賴之則晉國貳諸侯貳則晉國壞晉國貳則子之家壞何沒沒也將焉用賄（左傳）

二　子路問彊子曰南方之彊與北方之彊與抑而彊與寬柔以敎不報無道南方之彊也君子居

之衽金革死而不厭北方之強也而強者居之故君子和而不流強哉矯中立而不倚強哉矯國有道不變塞焉強哉矯國無道至死不變強哉矯（中庸）

三　通鑑擧要明紀一條

解縉初諭廣西復改交阯督餉化州入奏事會帝北征謁太子而還高煦言縉伺上出私覲太子徑歸無人臣禮帝震怒時縉方偕檢討王儐道廣東覽山川上疏請鑿贛江通南北奏至逮下在獄四年錦衣衞帥紀綱使獄卒醉以酒埋積雪中斃之仍籍其家妻子徙遼左

以上三題句讀訓点解釋ヲ施セ

右四時間

答案ハ毛筆ヲ用ヒヲ字書ヲ正シク書クベシ

答案ハ一題毎ニ別紙ニ認ムベシ

第十一回　漢文科本試驗　（明治三十一年）

一　禮記内則二章

子婦孝者敬者父母舅姑之命勿逆勿怠若飲食之雖不耆必嘗而待加之衣服雖不欲必服而待加之事人代之已雖弗欲姑與之而姑使之而后復之子婦有勤勞之事雖甚愛之姑縱之而寧數休之子婦未孝未敬勿庸疾怨姑敎之若不可敎后怒之不可怒子放婦出而不表禮焉

右句讀訓點及解釋ヲ施セ

二　韓非子内儲說下一章

文公之時宰臣上炙而髮繞之文公召宰人而譙之曰女欲寡人之哽耶奚爲以髮繞炙宰人頓首再拜請曰有死罪三援礪砥刀利猶干將也切肉々斷而髮不斷臣之罪一也援木而貫爨而不見髮臣之罪二也奉爟爐炭火盡赤紅而炙熟而髮不燒臣之罪三也堂下得無微有疾臣者乎公曰善乃召其堂下而譙之果然乃誅之

三　新唐書楊國忠傳一節

虢國夫人居宣陽坊左國忠在其南自臺禁還趣虢國第一郎官御史白事者皆隨以至居同第出騈騎相謂笑施々若禽獸然不以爲羞道路爲阯駭明年大選因就第唱補惟女兄弟覩之士之醜野蹇偃者呼其名輒笑于堂聲徹諸外士大夫詬恥之先是有司已定注則過門下侍中給事中按閱有不可辦之國忠則召左相陳希烈隅座給事中在旁既對注曰已過門下矣希烈不敢

異侍郎章見素張倚與本曹郎趨走堂下拘案牒國忠願女弟曰紫袍二主事何如皆大噱鮮于仲通等諷選者鄭怱願立碑省戶下以頌德詔仲通爲頌帝爲易數字因以黃金識其處

右句讀及訓點ヲ施シ一印ヲ附シタル所ニ解釋ヲ施セ

四　中法會訂越南新約第二款

中國既訂明於法國所辦弭亂安撫各事無所掣肘凡有法國與越南自立之條約章程或已定者或續立者現時並日後均聽辦理至法越往來言明必不致有礙中國威望體面亦不致有違此次之約

右句讀及訓點ヲ施セ

五　禮記、韓非子、新唐書、三言ノ解題ヲ書セヨ

右五問ヲ通ジテ四時間

作文題

一　誡學生飲酒文

二　誡學生喫煙文

右二題ノ內一ヲ選ミテ三時間ニ綴ラシム

第十二回　國語科豫備試驗　（明治二十二年）

解釋

一　七日の若菜を人の六日にもてさわぎとりちらしなどするに見も知らぬ草を子どものもて來たるを何とかこれをばいふといへどとみはもいはずいざなどこれかれ見あはせてみゝな草となんいふといふものゝあればうべなりけりきかぬ顏なるはなど笑ふに又をかしげなる菊の生ひたるをもてきたれば

つめどなほみゝな草こそつれなけれあまたしあればきくもまじれり」といはまほしけれど聞きいるべくもあらず

二　今は天下只武德に歸して公家あつて何の用にか立つべきとて月卿雲客諸司格勤の所領はいふに及ばず竹園椒房禁裏仙洞の御領までも武家の人押領しける間曲水重陽

の宴も絶えはて白馬蹈歌の節會も行はれず形の如き儀計りなり

（右は傍線を施したる諸句のみを解釋せよ）

三　(い)　扶桑豈無影乎浮雲掩而忽昏叢蘭豈不芳乎秋風吹而先敗　（註略）

(ろ)　苗代の色紙にあそぶかはづかな

文法（二時間）

一　かなづかひ法のおこれる所以を問ふ

二　方言の性質を略述せよ

三　明治以前に成れる語學書の重なるもの五種を擧げよ

四　左の文章中に誤謬あらば之を指摘しかつ其の理由を述べよ

(い)　室内にては高聲に談話を禁ず

(ろ)　その誠忠大に人を感ずるものあり宜なるかな芳名嚇々として後世に傳ふるや

五　左の文章を文章法の上より解剖せよ

灸治あまた所になりぬれば神事に穢ありといふことは近く人のいひ出せるなり

文學史（二時間）

一　足利時代の文學の概略を述べよ

二　歌學に關する書五種の名と其の著者の名とを擧げよ

三　俳諧歌と俳諧との別如何

四　三鏡を解題せよ

五　左の人名を時代の順序に配列せよ

藤井高尚　藤原爲兼　都良香　小澤蘆庵　紀時文　藤原基俊　仙覺律師

作文（二時間）

神皇正統記を讀む（普通文體）

○

一問題ごとに別紙に認むべし

第十二回　漢文科豫備試驗　（明治三十二年）

一　孟子盡心上篇一章

孟子曰廣土衆民君子欲之所樂不存焉中天下而立定四海之民君子樂之所性不存焉君子所性雖大行不加焉雖窮居不損焉分定故也君子所性仁義禮智根於心其生色也睟然見於面盎於背施於四體四體不言而喻

二　八大家文卷五藍田縣丞廳壁記前段

三　通鑑攬要續編卷三宋熙寧九年條

亟之職所以貳令於一邑無所不當問潁下主簿尉主簿尉乃有分職丞位高而偪例以嫌不可否事文書行吏抱成案詣丞卷其前鉗以左手右手摘紙尾鴈鶩行以進平立睨丞曰當署丞涉筆占位署惟謹目吏問可不可吏曰得則退不敢略省漫不知何事官雖尊力勢反出主簿尉下諺數慢必曰丞至以相訾謷亟之設豈端使然哉

王安石再相屢謝病求去帝厭之乃以使相判江寧府安石處金陵往往寫福建子三字蓋深悔爲呂惠卿所誤也吳充子安持雖娶安石女而數爲帝言新法不便帝察充中立無與遂相之充欲有所變革乞召還司馬光呂公著韓維蘇頌及薦孫覺李常程顥等十人光貽書充曰今日救天下之急當罷青苗免役保甲市易而息征伐之謀充不能用王珪無所建明率道諛將順嘗時一目爲三旨相公以其上殿進呈云取聖旨上可否訖云領聖旨退諭稟事者云已得聖旨也惠卿告安石罪發其私書有無使上知語帝以安石爲欺而賢京故召用之

四　小學外篇嘉言第五廣敬身一節

胡文定公曰人須是一切世味淡薄方好不要有富貴相孟子謂堂高數仞食前方丈侍妾數百人我得志不爲學者須先除去此等常自激昂便不到得墜墮

四問ヲ通ジテ四時間トス

四問共ニ本紙ニ句讀訓点ヲ施シ其ノ解釋ヲ試驗用紙ニ認ムベシ

解釋ハ一問毎ニ別紙ニ認ムベシ

凡テ答案ハ毛筆ヲ用ヒテ字畫ヲ正シク書クベシ

第十二回　國語科本試験　（明治三十二年）

一　左の文章及び歌を解釋せよ

（い）大堪の前座主の宮もうるはしき武士姿に出たゝせ給ふ卯花威の鎧に鍬形の兜たてまつり大矢おひてぞおはする妙法院の宮はすゞしの御衣の下に萠黄の御腹巻とかや著たまへり大納言はからの香染の薄物の狩衣にけちえんに赤き腹巻をすかしてさすがに蒔繪の細太刀をぞはき給ひける

（ろ）こよろぎの磯たちならしいそ菜つむ目ざしぬらすな沖にをれ浪

二　左の文章を普通文に譯せよ

大江戸のうちにとみざはといへるまちあり朝市とかいひてそこにあるあき人のかぎりつゞめてより起きいでゝかどのとにむしろしき設けてふるき帶なえばめる衣などいくらともなく積みならべてあきなふ明けはなるゝ頃よりかしましきまで人つどひ來りていぬのがほしと思ふものは求めつゝいぬ新しげなるはふつにはなくてくれなゐのうはしらめるもの紫のはえおくれたるたぐひのみぞあめるあるは解衣のみだれたる藤衣のまどほなるえらぬひの筑紫のわた河内女の手ぞめのいとみちのくの衣のぶすりはせをの蜑の衣ほごろもなどさへこゝら見ゆをのこの禮服とするもの〻中にうへの衣の袖をきりて上下と名づけたるものありこれにつぎてふみこみはちゝもゝひきなどいへるものあがりてのよ人は見も知らぬものをあつめて馬にはせ船につみなどして越の國みちのくのはてまでももてゆきてひさぎ賣りそれより蝦夷が千嶋の遠き境にもゆきわたることゝぞきくかゝるものはもとたづきなきわび人の朝夕の烟立てかねてせんすべなきまゝたくはへたる衣とうでゝあしいくらこがねいくらとてたぎのりかりつるを八月のほどに購ひえざれば定まれることにてものかす人の心にまかせてかゝるところには賣りわたしぬることぞすべて新らしきにくらぶればふるものは價いやしされどよろしき人のこれを求め買はんやは買ふものうしなひし人ともに又わび人なればかゝる市の賑しきこそ世に貧しき人の絶えざるしるしなれと思へば例のもろき涙のほろほろとこぼれいづる

をあしたの露にかこちなしつゝ鳴く音悲しきちどりの橋をうちわたりてかしこへいそぎぬ

三　師範學校中學校高等女學校國語科用讀本には差異を立つる必要ありや

右三時間

第十二回　漢文科本試驗（明治三十二年）

解釋

一　禮記學記篇一節

今之敎者呻其佔畢多其訊言及于數進而不顧其安使人不由其誠敎人不盡其材其施之也悖其求之也佛夫然故隱其學而疾其師苦其難而不知其益也雖終其業其去之必速敎之不刑其此之由乎

二　資治通鑑卷二百六唐紀聖曆元年十月條「癸卯以狄仁傑爲河北道安撫大使時北人爲突厥所驅逼者虜退懼誅往往亡匿仁傑上疏以爲朝廷議者皆罪契丹突厥所脅從之人言其跡雖不同心則無別誠以山東近緣軍機調發傷重家道悉破或至逃亡重以官典侵漁因事而起枷杖之下痛切肌膚事迫情危不循禮義愁苦之地不樂其生有利則歸且圖賒死此乃君子之愧辱小人之常行也又諸城入僞或待天兵將士求功皆云攻得臣憂濫賞亦恐非專以經與賊同是爲惡地至於汚辱妻子劫掠貨財兵士信知不仁簪笏未能以免乃是賊平之後爲惡更深且賊務招携秋毫不犯今之歸正即是平人翻被破傷豈不悲痛夫人猶水也壅之則爲泉疏之則爲川通塞隨流豈有常性今負罪之伍必不在家露宿草行潛竄山澤赦之則出不赦則狂山東羣盜緣茲聚結臣以邊塵暫起不足爲憂中土不安此爲大事罪之則衆情恐懼恕之則反側自安伏願曲赦河北諸州一無所問制從之

三　唐宋八大家文卷廿七曾鞏移滄州過闕上疏一節

竊觀於詩其在風雅陳大王王季文王致王迹之所由與武之所以繼代而成之興則美有假樂鳧鷖戒有公劉洞酌其所言者蓋農夫女工築室治田師旅祭祀飲尸受福委曲之常務至於兎苴之武夫行修於隱牛羊之牧人愛及微物無不稱紀所以論功德者由小以及大其詳如此後嗣所以昭先人之功當世之臣子所以歸美其上非徒薦告鬼神覺悟黎庶而已也

右本紙ニ句讀訓點ヲ施シ別紙ニ解釋スベシ

解釋ノ一ヨリ通ジテ三時間

四　孫子軍形篇

孫子曰昔之善戰者先爲不可勝以待敵之勝不可勝在己可勝在敵故善戰者能爲不可勝不能使敵必可勝故曰勝可知而不可爲不可勝者守也可勝者攻也守則不足攻則有餘善守者藏於九地之下善攻者動於九天之上故能自保而全勝也見勝不過衆人之所知非善之善者也戰勝而天下曰善非善之善者也故舉秋毫不爲多力見日月不爲明目聞雷霆不爲聰耳古之所謂善戰者勝勝易勝者也故善戰者之勝也無智名無勇功故其戰勝不忒不忒者其所措必勝勝已敗者也故善戰者立於不敗之地而不失敵之敗也是故勝兵先勝而後求戰敗兵先戰而後求勝善用兵者修道而保法故能爲勝敗之政兵法一曰度二曰量三曰數四曰稱五曰勝地生度度生量量生數數生稱稱生勝故勝兵若以鎰稱銖敗兵若以銖稱鎰勝者之戰民也若決積水於千仞之谿者形也

右本紙ニ句讀訓點ヲ施シ解釋スベシ

解釋ノ五及設問マデ通ジテ二時間

五　清通典卷廿二選擧典考績順治十一年上諭

十一年十二月以考察言官申諭吏部曰近來言官未見建白切當及糾參關要者皆因僅被論之人反唇仇訐遂爾緘口自今以後凡被論者如有辨處止許就所參事欵據實剖白不許反唇仇訐有乖法紀言官亦不得挾私誣揑自取咎戾其參奏公私當否或現任或陞任考察京官之時該部分別核奏以爲勸懲爾部即行嚴飭

右本紙ニ句讀訓點ヲ施スベシ

設問

一　六朝文學ノ一斑

二　十三經ノ名目

三　左ノ三家ノ重要ナル著書

鄭玄　朱熹　顧炎武

右解釋ノ四ヨリ通ジテ二時間

第十三回　國語科豫備試驗　（明治三十三年）

文學史（二時間）

一　國文學に影響せる漢文學の書三種を擧げよ

二　源氏物語の後世の文學に及ぼしたる影響如何

三　左の天皇及び士庶の文學上に於ける事蹟を問ふ

（い）後鳥羽院　（ろ）戸田茂睡　（は）京極黄門　（に）林述齋　（ほ）善相公

四　徳川時代に現はれたる國語上の辭書を擧げよ

五　明治以後の文章にして普通文の模範たるべきものを擧げよ

作文（二時間）

國語統一の方法を論ず（普通文體）

解釋（第二第三は傍線を施したる語句のみを解釋すべし）（二時間）

一　二月一日の夜常よりも九重の宮の内人ずくなにておほかた夜も靜かなるに子の時ばかりに閑院殿の二條おもての對より火出で來て棟もえおつる程にぞ始めて見つけたるあさましともなのめなり何のたよりもなく只あわて騷ぎ我れも人もうつし心なければ公直の中將の御とのゐに候ひけるが車の陣なるを召して皇后宮の御方へよす内のうへをば御匣殿抱き奉らせ給ひて宮もたてまつる劍璽ばかりとり具して門を急ぎ出でさせ給ふとばかりありて權中納言實雄の參り給へりける車にめし移りて春日富小路に公相の大納言のおはする家に行幸なる

二　近年殿樣の御勝手向不如意の由にて御取箇筋手強く相成り公事訟訴日增しに募り其の上御裁許隙取百姓共の難義以の外なり

三　（い）文體は内容の發表に對する必然の形式ならざるべからず

（ろ）君の説は凡て消極的なり請ふ之を積極的に論せよ

四　參覲交替　刀自　行縢　左ノ宰相中將　怠狀

文法（二時間）

一　左の文句中の誤謬を正し併せて其理由を説明せよ

(い)　來しかた行末のみ案ぜられて……

(ろ)　來しかた行末のみ案じられて……

(は)　甲氏は體格つよしや否や

(ろ)　甲氏は體格つよきや否や

(は)　甲氏は體格つよきか否や

(に)　甲氏は體格つよきか否か

二　左の歌文の主語幷に説明語を指示せよ

(い)　餘り規則に拘泥さるゝはよろしからざるやに聞及び候

(ろ)　圖書の檢査を了はるときは一々之に檢印を附す例なるも時々は之を略すこともなきにはあらずといふ

(は)　世のうきも人のつらきも忍ぶるに戀しきにこそおもひわびぬれ

(ろ)　彼等が首を正行正時が手にかけて取り候か正行正時が首を彼等にとられ候か決然國を去る

三　左の文句中の國、妻の二語は全く同格なりと認めて可なりや否や之を詳説せよ

友人妻を去る

四　豆爾乎波研究に關する書籍中重要なるもの三種を擧げよ

五　左の文章を國語の法則に據りて書下にせよ（女子の受驗者には之を省く）

古之學者必有師、師者所以傳道授業解惑也、人非生而知之者、孰能無惑、惑而不從師、其爲惑也終不解矣、生乎吾前其聞道也固先乎吾、吾從而師之、生乎吾後、其聞道也、亦先乎吾、吾從而師之、夫庸知其年之先後生於吾乎、

○

注意

答案ハ必毛筆ニテ認ムベシ

答案ハ字畫ヲ誤ラザルヤウ明晰ニ認ムベシ

答案ハ一問題毎ニ別綴ニスベシ

答案ハ各紙ニ氏名ヲ認ムベシ

第十三回　漢文科豫備試驗　（明治三十三年）

解釋

一　論語衞靈公篇中一章

子張問行子曰言忠信行篤敬雖蠻貊之邦行矣言不忠信行不篤敬雖州里行乎哉立則見其參於前也在輿則見其倚於衡也夫然後行子張書諸紳

二　韓非子卷十八六反一節

夫姦必知則備必誅則止不知則肆不誅則行夫陳輕貨於幽隱雖曾史可疑也懸百金於市雖大盜不取也不知則曾史可疑於幽隱必知則大盜不取懸金於市故明主之治國也乘其守而重其罪使民以法禁而不以廉止母之愛子也倍父令之行於子者十母吏之於民無愛令之

三　明鑒易知錄卷十四崇禎十六年六月李自成大造戰艦條

自成自隨騎兵五營營精騎二千步兵十四哨哨精卒三千劉宗敏總步白旺總騎每屯以騎兵一營外圍巡徼晝夜更番餘營以次休息警候嚴密人不得逃逸者追獲必磔之男子十五以上四十以下咸掠爲養子爲奴隸故每破一邑衆輒增數萬每一精兵則畜役人二十餘其駄載馬騾不與焉衆實五六萬且百萬也雖拔城邑不聽屋居寢處布幕彌望若穹廬

四　唐宋八大家文柳宗元零陵郡復乳穴記一節

石鐘乳餌之最良者也楚越之山多產焉於連於韶者獨名於世連之人告盡焉者五載矣以貢則買諸他部今刺史崔公至逾月穴人來以乳復告邦人悅是祥也雖然謠曰毗之熙熙崔公之來公化所徹士石蒙烈以爲不信起視乳穴穴人笑之曰是惡知所謂祥耶嚮吾以刺史之貪戾嗜利徒吾役而不吾貨也吾是以病而紿焉今吾刺史令明而志潔先賴而後力欺誣屏息信順休洽吾以是誠告焉

右本紙ニ句讀訓點ヲ施シ別紙ニ解釋ヲ施スベシ
四問ヲ通ジテ四時間トス
答案ハ毛筆ヲ用ヒテ字畫ヲ正シク書クベシ

第十三回　國語科本試驗（明治三十三年）

解釋文法（二時間）

一　東山の邊なる住家をいで逢坂の關を過ぐるほどに駒引きわたる望月の頃もやう
やう近き空なれば秋霧立ちわたりてふかき夜の月影ほのかなりゆふつけ鳥かすかに
音づれて遊子猶殘月にゆきけむ函谷の有樣思ひ出でらる（東關紀行）

二　やはらぐる光にあまるかげなれやいすゝがはらの秋の夜の月（新古今集）

三　易水に葱ながるゝ寒さ哉（蕪村句集）

四　左の二文の意義の異同を説明せよ
いかになりたまひにきとか人にもいひ侍らむ
いかになりたまひにしと人にもいひ侍らむ

五　左の歌の係結を詳細に批評せよ
山里にたれをまたこはよぶこ鳥ひとりのみこそすまむとおもふに（山家集）

作文（二時間）

作文添削の標準を論ず

口頭試驗

神皇正統記後醍醐天皇の條「昔し人を用ゐられし日い……より白河の御代まではよく官を重くおきたまひけり」まで講讀質問
又は常陸帶の序文同前（人によりて同じからず。）
文法質問、文學史質問。

第十三回　漢文科本試驗（明治三十三年）

一　左傳襄公三十一年十二月一節

鄭人游于鄉校以論執政然明謂子產曰毀鄉校如何子產曰何爲夫人朝夕退而游焉以議執政之善否其所善者吾則行之其所惡者吾則改之是吾師也若之何毀之我聞忠善以損怨不聞作威以防怨豈不遽止然猶防川大決所犯傷人必多吾不克救也不如小決使道不如吾聞而藥之也然明曰蔑也今而後知吾子之信可事也小人實不才若果行此其鄭國實賴之豈唯二三臣仲尼聞是語也曰以是觀之人謂子產不仁吾不信也

右本紙ニ句讀返點送假名ヲ附ケ別紙ニ解釋ヲ施スベシ

第二第三ト通ジテ三時間

二　荀子性惡篇一節

凡性者天之就也不可學不可事禮義者聖人之所生也人之所學而能所事而成者也不可學不可事而在人者謂之性可學而能可事而成之在人者謂之僞是性僞之分也今人之性目可以見耳以可以聽夫可以見之明不離目可以聽之聰不離耳目明而耳聰不可學明矣

右本紙ニ句讀返點送假名ヲ附ケ別紙ニ解釋ヲ施スベシ

三　資治通鑑卷二百二十六唐紀德宗建中元年正月條

始用楊炎議命黜陟使與觀察刺史約百姓丁產定等級改作兩稅法比來新舊徵科色目一切罷之二稅外輒率一錢者以枉法論唐初賦斂之法曰租庸調有田則有租有身則有庸有戶則有調玄宗之末版籍浸壞多非其實及至德兵起所在賦斂迫趣取辦無復常準賦斂之司增數而莫相統攝各隨意增科自立色目新古相仍不知紀極民富者丁多率爲官爲僧以免課役而貧者丁多無所伏匿故上戶優而下戶勞吏因緣竄食旬輸月送不勝困弊率皆逃徙爲浮戶其土著百無四五至是炎建議作兩稅法先計州縣每歲所應費用及上供之數而賦於人量出以制入戶無主客以見居爲簿人無丁中以貧富爲差爲行商者在所州縣稅三十之一使與居者均無僥利居人之稅秋夏兩徵之其租庸調雜徭悉省皆總統於度支上用其言因赦令行之

右本紙ニ句讀返點送假名ヲ附ケ線ヲ引キタル所ハ別紙ニ解釋スベシ

第一第二ト通ジテ三時間

四　魏徵述懷

中原還逐鹿投筆事戎軒縱橫計不就慷慨志猶存仗策謁天子驅馬出關門請纓繫南粵憑軾下東藩爵紆陟高岫出沒望平原古木鳴寒鳥空山啼夜猿既傷千里目還驚九折魂豈不憚艱險深懷國士恩季布無二諾侯嬴重一言人生感意氣功名誰復論

右本紙ニ句讀反點送假名ヲ附ケ別紙ニ解釋ヲ施スベシ

第五第六ト通ジテ二時間

五　光緒二十五年十二月五日電傳上諭

初四日奉上諭袁世凱電奏山東平陰、肥城、兩縣匪徒聚衆滋事將教士拘至毛家鋪地方該署撫多方設方募救並派馬隊兜拏卒以防護不及被匪殺害教士等語覽奏殊深惋惜各國傳教載在約章迭經諭令各該督撫飾地方官隨時隨事認眞保護奚止三令五申乃山東地方竟有敎士被害之事該地方文武各員事前疏於防範已屬咎無可辭若不即將兇犯趕緊緝獲尙復成何事體着袁世凱迅將疏防之該管各官先行參處一面勒限嚴緝兇犯務獲懲辦以靖地方而郭鄰好欽此

右本紙ニ句讀反點送假名ヲ明細ニ施スベシ

第四第六ト通ジテ二時間

六　設問

(い)　唐代ニ於ケル古文ノ消長

(ろ)　宋清二代ニ於ケル學風ノ異同

(は)　仁齋徂徠東涯ノ主要ナル著書

右第四第五ト通ジテ二時間

作文題

送清國留學生歸國序

口頭問題

或曰以德報怨如何。子曰何以報德。以直報怨。以德報德。

第十四回　國語漢文科豫備試驗　（明治三十三年）

解釋

一　男君は松君とてうまれたまひしより祖父おとゞいみじきものにおぼしてむかへたてまつり給ふたびごとにおくりものをせさせたまひ御乳母も饗應し給ひし君ぞかしこのごろ三位しておはすめるは此の君を父おとゞあなかしこ我がなからむ世にあるまじきわざをせず又身すてがたしとてものおぼえぬ名簿うちしてわがおもてふせていでやさありしかどかゝるぞかしと人にいひのたてせさすな世の中にありわびなんきはゝ出家すばかりなりとなくなくいひおほせ給ひけり（大鏡）

二　或人いはく人の世にある習ひ憍慢を先としてよく穩便なるは少し或はすきにつけて笑はるゝあり是は昔の人ゝことに心もすきて花月をもいたづらに過さゞりけり今は時世改まりておもしろき事もさる程にてそれにのみしみかへりてはなど心一つをやりて人目にあまる難あり或はふるまひにつけたる僻事ありこれは立居の有樣のめたゝしくをこがましきなり（十訓抄）

三　齋王　御息所　おほいまうちぎみ　扶持米　柳營　矛盾　塞翁馬　朝三暮四

權輿　布衣の侍

四　夫聖人之治國不恃人之爲吾善也而用其不得爲非也恃人之爲吾善也境內不什數用人不得爲非一國可使齊爲治也用衆而舍寡故不務德而務法夫必恃自直之箭百世無矢恃自圜之木千歲無輪矣自直之箭自圜之木百世無有一然而世皆乘車射禽者何也隱括之道用也雖有不恃隱括而有自直之箭自圜之木良工弗貴也何則乘者非一人射者非一發也不恃賞罰而恃自善之民明主弗貴也何則國法不可失而所治非一人也故有術之君不隨適然之善而行必然之道（韓非子）

五　當堯之時擧天下而授之舜舜得堯之天下而又授之禹方堯之未授天下於舜也天下未嘗聞有如此之事度其當時之民莫不以爲大怪也然則舜與禹也受而居之安然若天下固其所有而其祖宗既已爲之累數十世者未嘗與其民道其所以當得天下之故也又未嘗悅之以利而間之以丹朱商均之不肖也其意以爲天下之民以我爲當在此位也則亦不俟乎援天以神之譽已以固之也（唐宋八家文）

四五ハ本紙ニ句讀、訓點ヲ附シ、別紙ニ解釋ヲナスベシ。右四時間

設問

一　言語學の効用を略述せよ

二　文語の動詞の活用と口語動詞の活用とを對照して其の關係を述べよ

三　左の文字の用法を説明せよ

(い)　又　亦　復

(ろ)　則　卽　乃　輒

四　左の文章の構造を説明せよ

吾が郷神戸にうそ鳥多くきたり庭の梅竹軒ちかき枝までこの鳥ならぬところなかりき

五　左の人々の文學上の事蹟を問ふ

宗良親王　歸震川　三蘇　宗祇　太安萬侶

右二時間

作文

中等教育に於ける國語漢文の關係を論ず（普通文）

右二時間

○注意

答案ハ毛筆ニテ一問題ゴトニ別紙ニ認ムベシ

第十四回　國語漢文科本試驗　（明治三十四年）

一　左の文を解釋すべし

遠き處より思ふ人の文を得てかたくふんじたるそくひなど放ちあくるほど心もとなしとみの物縫ふに暗きをり針に糸つくるされど我れはさるものにてありぬべき處を

とらへて人につけさすそにそれもいそげばにやあらむとみにもえさし入れぬをいで只なすげそといへどさすがになどてかはと思ひ顔にえさらぬは憎ささへそひぬ（枕草子）

二　左の文は傍線引きたる處のみ解釋すべし

世に歌よむ人多し或は短歌に巧みに或は長歌にかしこく或は文かくわざにすぐる世に古學びする人多し或は御代々々の書をあきらめ或は四つのおきて文に委しく或はあがれる世のふることぶみに心を深め或は後の世の物語書を枕ごととす其の人に問へば彼れに委しきは此れにおろかに此れに思ひ入りたるはかしこに心淺し然のみならずやまとざうしの上には口さきらきゝたるも唐ぶみに向へば爪くはるゝ類多しまこと其れもことわり誰やし人かは皆がら兼ね備へたるあらむわが家の佛貴ぶにはなけれど此の道々に行きとほりて萬たどたどしからぬは吾が師錦織の舍の翁のみなむおはしける　（泊洒舍文集）

三　左の歌に文法上の誤謬あらば其の理由を附して說明せよ

うめがかをそでにうつしてとゞめてはばるはすぐともかたみならまし

四　左の語の差別を說明せよ

見す　見さす　見せさす

作文

自己の經歷（叙事文）

（右四問題及作文を通じて四時間）

一　左の文を解釋すべし（本紙ニ句讀訓點ヲ附シ別紙ニ解釋ヲナスベシ）

天將降大任於是人也必先苦其心志勞其筋骨餓其體膚空乏其身行拂亂其所爲所以動心忍性曾益其所不能人恒過然後能改困於心衡於慮而後作徵於色發於聲而後喩入則無法家拂士出則無敵國外患者國恒亡然後知生於憂患而死於安樂也（孟子）

二　管仲既任政相齊以區々之齊在海濱通貨積財富國彊兵與俗同好惡故其稱曰倉廩實而知禮節衣食足而知榮辱上服度則六親固四維不張國乃滅亡下令如流水源令順民心故論

卑而易行俗之所欲因而予之俗之所否因而去之其爲政也善因禍而爲福轉敗而爲功貴輕重任權衡（史記）

三　明代古文辭の德川時代の漢文學に及ぼしたる影響を略述せよ

四　左の文を漢文に復せよ

道ハモトヨリ遠キニ行ハレテ近キニトドマルアリ往ニ忽ニセラレテ今ニ貴バルヽモノアリタヾ世俗好惡ノ然ラシムルノミニアラズマタ其ノ理マサニ然ルベキモノアリ（歐陽修文中ノ一節）

（右四問題ヲ通ジテ四時間）

第十五回　國語漢文科豫備試驗　（明治三十五年）

設問

一　左の歌を文章上より解剖せよ

世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな

二　左の文中の「ながら」といふ語を說明せよ

彼は書を讀みながら道をありく

人道を唱へながら掠奪を事とす

光秀は皮ながら粽を食へり

三　鎌倉時代の著名なる文學書三種を擧げて解題せよ

四　諧聲文字と會意文字との區別を說明し且つ二三の實例を擧示せよ

五　孟荀の學說の異同を略述せよ

女子師範學校、師範學校女子部、高等女學校のみの敎員志願者は第四問及び第五問に答ふるを要せず

作文

海　（普通文）

以上四時間

讀方及釋解

一　左の文を解釋せよ（但讀方を附するに及ばず）

圓融院の御はてのとし皆人御服ぬぎなどして哀なる事をおほやけよりはじめて院の人も花の衣になどいひけむ世の御事など思出るに雨いたうふる日藤三位のつぼねに蓑虫のやうなるわらはの大きなる木の白きにたて文をつけてこれ奉らむといひければいづこよりぞけふあす御物忌なれば御蔀もまゐらぬぞとてしもはたてたるしとみのかみより取り入れてなさんとは聞かせ奉らず物いみなればえ見ずとてかみについさしておきたるをつとめて手あらひて其巻數とこひてふしをがみあけたればくるみ色といふ色紙の厚ごえたるをあやしと見てあけもてゆけば老法師のいみじげなるが手にて

これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつる椎柴の袖

二　左の語を解釋せよ（但讀方を附するに及ばず）

めもあやなり　おほどか　らうがはし　らうたし　塗籠　壺切の劍

御湯殿の鳴絃　獻芹之誠　點心　度牒

三　左の語の讀方を問ふ（但解釋するに及ばず）

落標　賢木　權　雲隱　總角　宿木　蜻蛉（以上源氏物語の巻名）　小大君　伊勢大輔　萬里小路藤房　月次祭　荷前幣　斛斗目　褂　春宮坊

注意　一より三まで男女を通じて

四　左の文章は本紙に句讀、反り點、送り假名を附し別紙に解釋をなすべし

吾之始歸也汝父免於母喪方逾年歲時祭祀則必涕泣曰祭而豐不如養之薄也間御酒食則又涕泣曰昔常不足而今有餘其何及也吾始一二見之以爲新免於喪適然耳既而其後常然至其終身未嘗不然吾雖不及事姑而以此知汝父之能養也（唐宋八家文）

五　左の文章は本紙に句讀、反り點、送り假名を附すべし（解釋するに及ばず）

老子曰慈故能勇儉故能廣或曰慈則安能勇曰父母之於子也愛之深故其爲之慮事也精以

深愛行精慮故爲其爲之避害也速而就利也果此慈之所以能勇也非父母之賢於人勢有所必至矣轍小而讀書兄父母之戒其子者諄諄乎惟恐其不盡惻惻乎惟恐其不入也曰嗚呼此父母之心也師之於弟子也爲之規矩以授之賢者引之不賢者不彊也君之於臣也爲之號令以戒之能者予之不能者不取也臣之於君也可則諫否則去子之於父也以幾諫不敢顯皆有禮存焉父母則不然子雖不肖豈有棄子者哉是以盡其有以告之無憾而後止詩曰洵酌彼行潦挹彼注茲可以饋饎豈弟君子民之父母夫雖行潦之陋而無所棄猶父母之無棄子也故父母之於子人倫之極也雖其不賢及其爲子言也必忠且盡而況其賢者乎（唐床八家文）

四　左の文章は本紙に句讀、反り點、送り假名を附し別紙に解釋をなすべし

「甲」仁者以財發身不仁者以身發財（大學）

「乙」人不可無恥無恥之恥無恥矣（孟子）

五　左の文章は本紙に句讀、反り點、送り假名を附すべし解釋するに及ばず

曾氏入京師送正成首於河內一家聚哭正行起入室其母尾而鬪之則執父所授刀將自殺母經入奪刀而泣曰汝何惑焉乃父之遺歸汝豈敎汝自殺也汝唧遺命歸來告我而汝先志之惡

能任王事正行大悟自是以討國賊復父讐爲志常與兒童嬉戲爲馳逐狀曰追足利也爲斬首狀曰獲曾氏元也楠氏族黨多死湊川而河內紀伊之間猶有義故存者皆思戴正行（日本外史）

女子師範學校、師範學校女子部、高等女學校のみの敎員志願者の分

（注意）讀方及解釋は五問題を通じて四時間とす。

第十五回　國語漢文科本試驗　（明治三十五年）

一、　陸贄上奏曰李懷光當管徒足以獨制兇寇逗留未進抑有它由所患太彊不資傍助比者又遣李晟李建徽楊惠元三節度之衆附麗其營無益成功祇足生事何則四軍接壘羣帥異心論勢力則懇絕高卑據職名則不相統屬懷光輕晟等兵微位下而忿其制不從心晟等疑懷光養寇蓄姦而怨其事多陵己端居則互防飛謗欲戰則遞恐分功齟齬不和嫌釁遂構俾之同處必不兩全彊者惡積而後亡弱者勢危而先覆覆亡之禍翹足可期舊寇未平新患方起憂歎所切實堪疚心太上消隱於未萌其次救失於始兆況乎事情已露禍難垂成委而不謀何以寧亂李

晟見機慮變先請移軍建徽惠元勢轉孤弱爲其呑噬理在必然它曰雖有良圖亦恐不能自扳極其危急惟在此時今因李晟願行便遣合軍同往託言晟兵素少慮爲賊泚所激藉此南軍迭爲爲猗角仍先諭旨密使促裝詔書至營即日進路懷光意雖不慾然亦計無所施是謂先人有奪人之心疾雷不及掩耳者也（通鑑）

本紙に句讀、反り點、送り假名を附すべし（解釋を要せず）

二　大學之法禁於未發之謂豫當其可之謂時不陵節而施之謂孫相觀而善之謂摩此四者敎之所由興也發然後禁則扞格而不勝時過然後學則勤苦而難成雜施而不孫則壞亂而不修獨學而無友則孤陋而寡聞燕朋逆其師燕辟廢其學此六者敎之所由興然後可以爲人師也（禮記）

本紙に句讀、反り點、送り假名を附し別紙に解釋をなすべし

（注意）本紙に句讀、反り點、送り假名を附し別紙に解釋をなすべし

通じて二時間とす

（以上師範學校、中學校、高等女學校敎員志願者の分）

○一　先生施敎、弟子是則、溫恭自虛、所受是極、見善從之、聞義則服、溫恭孝弟、母驕恃力、志母虛邪、行必正直、游居有常、必就有德、顏色整齊、中心必式、夙興夜寐、衣帶必飭、朝益暮習、小心翼翼、一此不懈、是謂學則（小學）

本紙に反り點送り假名を附し別紙に解釋をなすべし

二　齊閔王之后甄有大瘤號曰宿瘤初閔王出遊至東郭百姓盡觀宿瘤採桑如故王怪問曰寡人出遊百姓無少長皆來觀汝不一視何也對曰妾受父母敎採桑不受敎觀大王王曰此奇女惜哉宿瘤女曰婢妾之職屬之不二予之不忘中心謂宿瘤何傷王大悅曰此賢女也命後乘載之女曰父母在內使妾不受敎而隨王是奔女也王安用之王大慙遣歸使使者奉禮加金百鎰往聘贈之父母驚惶欲洗浴加衣裳女曰如是見王變容更服不見識也於是如故隱使者至閔王以爲后出令卑宮室塡池澤損膳減樂後宮不得重采期月之間化行鄰國（蒙求）

（注意）本紙に句讀、反り點、送り假名を附すべし（解釋を要せず）

通じて二時間とす

以上女子師範學校、師範學校女子部、高等女學校のみの敎員志願者の分

甲、設　問（漢文の部）

一　詩體の種類につきて知る所を擧げよ

二　故事成語を調ぶるに必要なる參考書を擧げよ

乙、復　文

三　左の文章を漢文に復すべし

范文正公少くして大節あり富貴貧賤毀譽歡戚に於ては一もその心を動かさず慨然として天下に志あり常に自から稱して曰く士はまさに天下の憂に先だちて憂へ天下の樂に後れて樂むべきなりとその上につかへ人を遇するに一に自信を以てし利害を擇みて趨舍をなさずそのなさんとするところは心ずその力を盡して曰くこれをなすべしその成と否とは我にあらざるものあり聖賢と雖も必ずることあたはず吾あに苟もせんやと

（注意）女子師範學校、師範學校女子部、高等女學校のみの教員志願者は答ふるを要せず

右三問題を通じて二時間とす

設　問（國語の部）

一　名詞及動詞は文の如何なる成分として用ひらるゝか其種々の場合を擧げよ

二　連歌狂歌狂詩今樣歌に付て知れる所を記せ

三　動詞助動詞を教授する順序方法を述べよ

四　中古文と普通文との主要なる差別は如何なる點にあるか

右四問題を通じて二時間とす

解　釋

一　左の文章の大意を數行に約述し且傍線を施したる語句を解釋せよ

御館に入らせられ御裝束改めさせ給へばやがておほとなぶらをまた照しかゞやけたり今日の道行きづとゐてまゐれとておまし近き所の一間なる簀子に召されたり大將殿見おこせ給ひて其貌姑射の山の御宮仕せし人世をはかなき者に思ひなして身は黑

くやつしたれど月花のなげきの譽れは物の心なき東人さへ聞き知りたるぞ文字の數だに歌とのみ思ひしもかうさし向ひては武士のまけじ心もあらずなりぬるぞ八百行く濱の眞砂の中には玉とて拾ひ収めたらむを語り聞ゆべしと仰せたうぶいみじう畏りて思ひかけず大樹の御蔭にまゐり侍ればいともかゝやかしさにぞたゞ夢路をたどるやうに侍りて聞えまつる事も侍らずさるとき御眼に見顯され侍ることそいといと有り難く侍れ伊勢の海千尋の濱に下り立つならひ侍れどかひあることもうち出で侍らぬにはこれとて捧げまつるべくもあらず君にもかねて學ばせ給ふとも洩れ聞き奉つる天の下まつりこち給ふ御うつはものゝ士なるにおぼし寄らせ給ふにはかけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍るになむ大空に羽うちつけて飛ぶ田鶴の聲霜枯の淺茅がもとの虫の音いかで取りなめて聞ゆべきあなかしこと申す打ちるませ給ひて弓とる人の心の猛きにはよむ歌も直くあからさまと聞くは誠にか歌は武士の荒々しき心には讀みうつし得まじきものに宮人達はさたし給へりとや軍に出で立ちて笛皷の音馬の蹄は物とも思はぬをのこ三十文字あまりの學びには心後るゝはいかにこは畏き御心

にもおぼし惑はせ給ふものか古の代々の帝は馬に鞍おき弓矢とらして軍に立たせ給ひし其の御歌をよみ見奉れば猛く直々しく調もいと高しとこそうち聞き侍れいでや歌よまむとては益荒雄心を取り隱しあてになよびかに讀みうつすべくするこそ此の道のいみじき煩なれ君が御心敏くたけきまゝにうちまねばせ給はむには今の世の誰かは立ちあへ奉らむ三尺の劍を執りて大風起り雲飛揚すとうたひ槊を横たへて烏鵲南にと咏せし君だちは鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや玉造らがいみじき磨りみがき染殿の八汐の色もはかなき目移ばかりは何にかはされど谷深き鶯の聲信濃路出づる荒駒の歩みいづれの道何の業にも始より勝れたらむは鬼にこそ侍らめといふ

（鎌倉右大將西行法師を召し問ふ記事、上田秋成作）

二　左の文を講義體に解說せよ

本問題には女子師範學校、師範學校女子部、高等女學校のみの教員志願者は答ふるを要せず

御祝言於于今雖事舊候猶以珍重々々慶賀遂日重疊家門迎年繁昌自他不可有際限早可

令參賀候抑御領入部無相違之條先以神妙之由御感候也就之四至榜至境阡陌聊不可被混亂他所被致清廉沙汰之條奉公之忠勤也（庭訓往來）

右二問題を通じて二時間とす

試驗問題集終

明治三十六年八月一日印刷
明治三十六年八月四日發行

編纂者　東京市神田區錦町一丁目十番地　國文學雜誌社
發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　三樹胖
印刷者　東京市神田區表神保町二番地　三島宇一郎
印刷所　同所（電話本局二三一六番）　弘文堂

定價金貳拾錢

發行所　東京市神田區錦町一丁目　特電話本局二四三八番　明治書院

明治書院出版國文書類

【總目錄は御一報】【次第無代進呈す】

落合直文先生
小中村義象先生合著

●大鏡詳解　全一冊

定價金壹圓六拾錢小包拾五錢

故文學博士小中村清矩先生閲
和田英松、佐藤球両先生著

●增鏡詳解　全一冊

定價壹圓七拾五錢小包拾五錢

文學博士松本愛重先生閲
江見清風先生著　印刷中

●水鏡詳解　全一冊

定價金

和田英松先生
佐藤球先生著

●榮華物語詳解　全十五冊

十二卷迄既成

定價八卷迄各四十錢
九卷ヨリ各四十五錢郵稅各六錢

文學博士小中村清矩先生閲
佐藤球両先生著

●十訓抄詳解　全二冊

定價金貳圓　小包拾錢

和田英松先生著

●官職要解　全一冊

定價金壹圓　郵稅拾錢

開根正直先生著

●更科日記略解　全一冊

定價金三拾五錢　郵稅四錢

文學士佐々政一先生著

●うづら衣評釋　全一冊

定價金三拾錢　郵稅四錢

文學士佐々政一先生著
近松評釋

●天の網島　全一冊

定價金三拾六錢　郵稅四錢

金子元臣先生著

●古今集評釋　二卷迄既成　全五冊

定價各冊四拾錢郵稅各六錢

文學士塩井正男先生著

●新古今集詳解　全六冊

定價一卷三十五錢
二、三各四十五錢郵稅四錢各六錢

文學士武島羽衣先生著

●國歌評釋　三卷迄既成　全五冊

定價各卷四拾錢　郵稅各六錢

服部躬治先生著

●戀愛詩評釋　全一冊

定價三拾五錢　郵稅四錢

金子元臣先生
柴山啓一郎先生著

●百人一首評釋　全一冊

定價貳拾五錢　郵稅四錢

文學博士小杉槇郎先生閲
神谷保朗先生著

●旋頭歌評釋

全一冊

定價金三拾五錢　郵稅四錢

金子元臣先生著

●歌がたり

全一冊

定價三拾五錢　郵稅四錢

文學士尾上柴舟先生著

●梨壺の五歌仙

全一冊

定價三拾錢　郵稅四錢

與謝野鐵幹先生著

●東西南北

全一冊

定價金貳拾錢　郵稅四錢

與謝野鐵幹先生著

●天地玄黃

全一冊

定價金貳拾錢　郵稅四錢

文學士武島羽衣先生著

●新撰詠歌法

全一冊

定價金四拾錢　郵稅六錢

落合直文先生著

●日本大文典

全一冊

定價一圓七拾五錢小包拾五錢

故文學博士小中村清矩先生著

●歌舞音樂略史

全一冊

定價金壹圓　郵稅八錢

文學士內海弘藏先生著

●中等教科日本文學史

全一冊

定價六拾五錢　郵稅八錢

落合直文先生
文學士內海弘藏先生著

●國文學史教科書

全一冊

定價金五拾錢　郵稅六錢

鳥野幸次先生著

●東關紀行詳解

全一冊

定價金三拾五錢　郵稅四錢

花岡安見先生著

●國語學研究史

全一冊

定價金三拾錢　郵稅四錢

落合直文先生著

●新編假名遣

全一冊

定價三拾錢　郵稅四錢

國詩會編纂

●國詩

全六冊

定價春秋各十五錢
夏十二錢郵稅各二錢

金子元臣先生
花岡安見先生著

●歌文書綱要

印刷中

全一冊

定價

金子元臣先生著

●徒然草解釋

全一冊

定價拾五錢　郵稅四錢

4-5P82

今泉定介先生著
保元平治 **物語解釋** 全一冊
定價金拾貳錢　郵稅四錢

落合直文先生閱
土佐日記讀本 全一冊
註釋附定價拾三錢　郵稅四錢

落合直文先生閱
十六夜日記讀本 全一冊
註釋附定價拾三錢　郵稅四錢

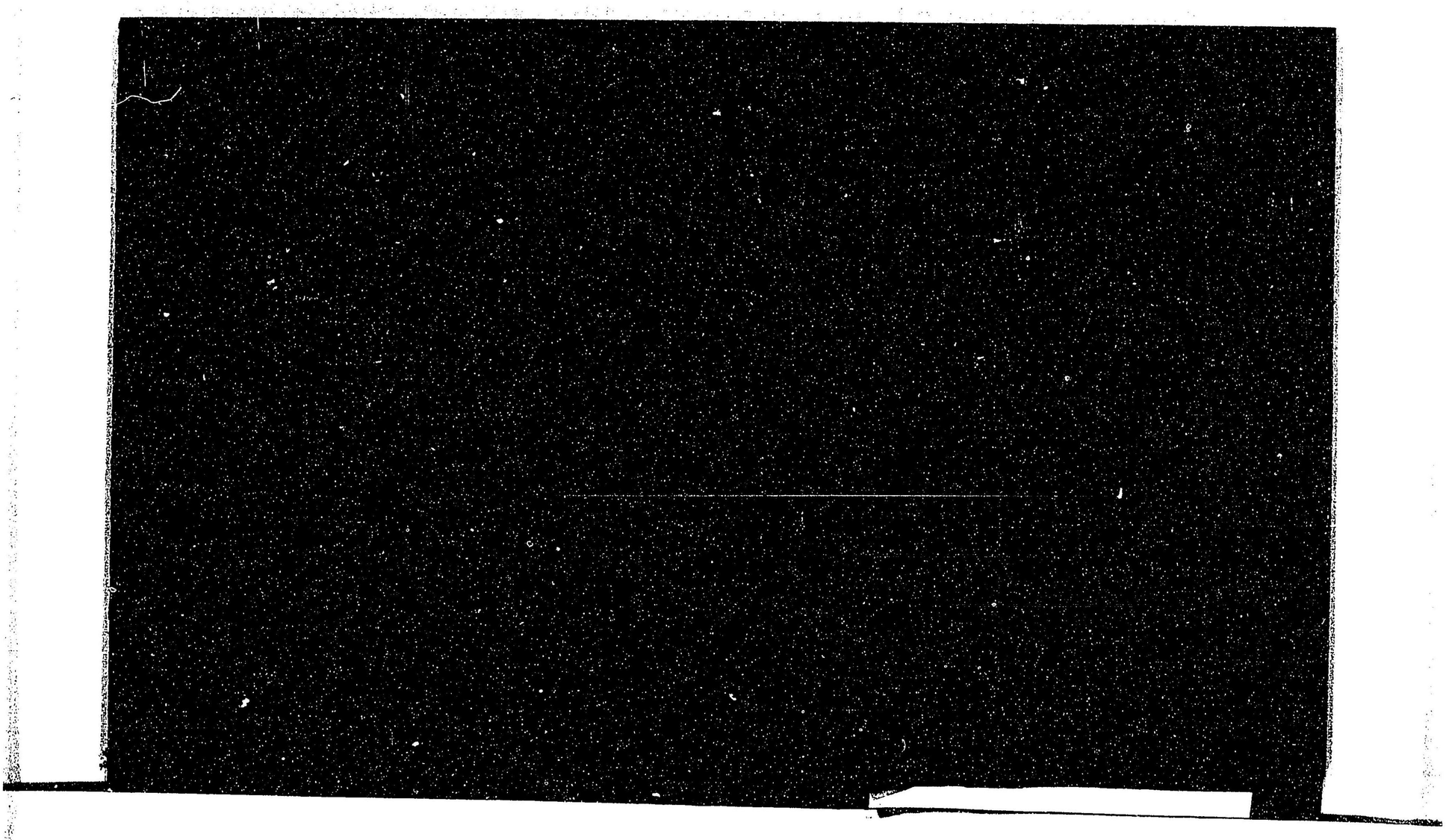
落合直文先生閱
竹取物語讀本 全一冊
註釋附定價拾五錢　郵稅四錢

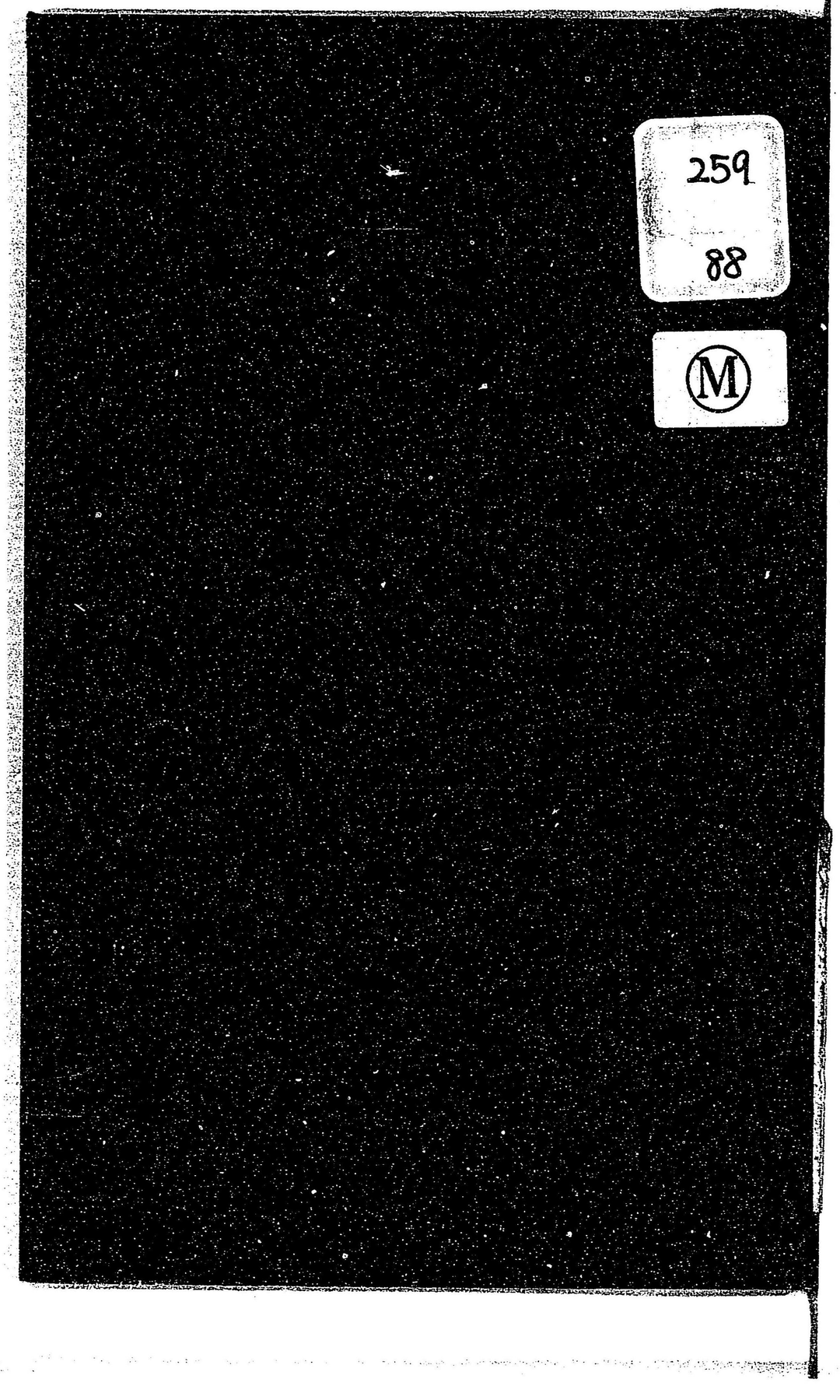
落合直文先生閱
藤井靜子女史編
萩の下露 全一冊
定價貳拾貳錢　郵稅四錢

櫻井一義先生著
太田道灌（附錄遺稿） 全一冊
定價金貳拾五錢　郵稅四錢

落合直文先生閱
方丈記讀本 全一冊
註釋附定價拾五錢　郵稅四錢

諸大家寄稿
國文學 每月一回 價一部六錢 發行 郵稅五厘
三十六年七月第五十六號發行



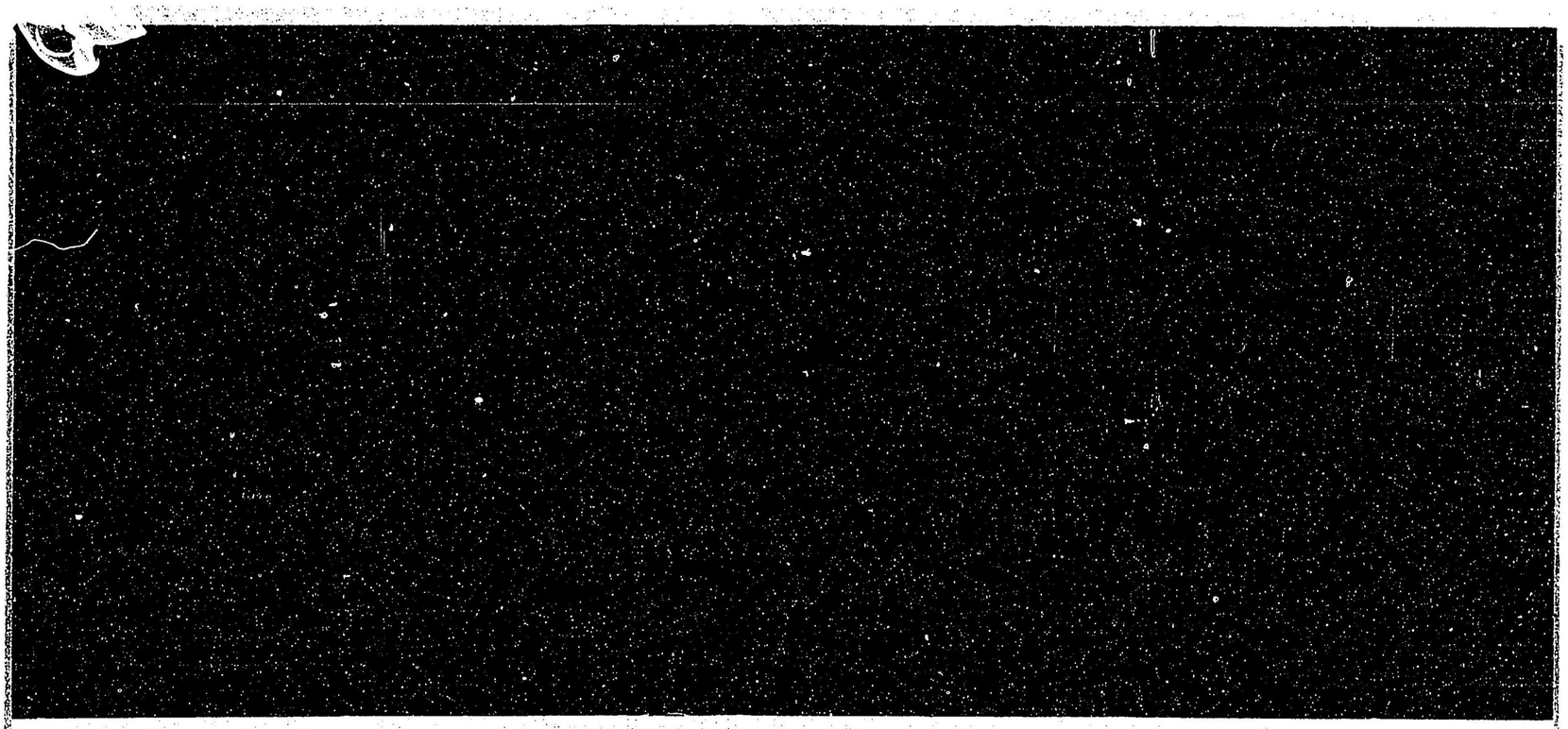


049849-000-2

259-88

国語漢文科中等教員志望者必携　検定試験問題集

国文学雑誌社／編

M36

BEM-0583